

研究紀要

第15号

1999

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

第 15 号

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

[論文]

- 東飼路式系土器へのモノローグ 谷井 彪 (1)
- 埼玉県における低地の周溝墓と建物跡 (2) 福田 聖 (35)
— 周溝墓とは何かを探るための試み —
- 弥生・古墳時代と神仙（道教）思想 中村 倉司 (73)
- 北陸系装飾器台の系譜についての小論 利根川章彦 (101)
— いわゆる「特殊な器台」について —
- 武藏寺谷廃寺の研究 昼間 孝志 (117)
木戸 春夫
赤熊 浩一

東釧路式系土器へのモノローグ

谷井 彰

要約 菱形文は縄文早期末から前期、更には中期の後半まで東日本縄文土器の基幹的モチーフとして時期、地域それぞれに変形しながら採用されたモチーフであった。前稿（谷井 1998）では検討に当たって大まかな編年軸あるいはモチーフの類似のみから検討し、福島県綱取遺跡（佐藤 1996）の浮島式系土器と北海道の東釧路式系土器と強引に対比することになった。これまでの編年軸による年代を考えれば、一方は前期中葉、他方は早期末に位置付けられ、その隔たりは大きい。年代だけを考えれば、「他人の空似」というほかなくなる。

そこで、本稿では関東の前期、特に花積下層式、関山式の変遷過程を基準としながら、東釧路式系土器群を東北北半の関係の中から検討したものである。その結果、東釧路IV式は長七谷地III群に後続する段階、コックロ式を含めた東釧路III式は同じく、長七谷地II群に後続し、関山式、黒浜式までの間、中茶路式については諸磯式の開始以降と対比してみた。

この結論は関東からの視点しかみることができない筆者の検討結果にすぎないが、これまで北海道で採用されている年代序列と大きく異なることになる。今後のダイアローグを期待したい。

はじめに

縄文前期の福井県鳥浜貝塚の発掘調査では多量の植物遺物を含む出土遺物が豊富に出土し、これまでの縄文時代のイメージを変えるものといわれた。縄文前期研究、特に生活史復元の一つの画期をなすものであった。現在話題となっている青森県三内丸山遺跡で発見された遺構・遺物の諸成果に対する一般的な評価はこの延長にあるといえるであろう。一方、この諸現象を支えるべき編年基軸となる土器研究は細分論を中心に進められてきた。今回対象とした早期末から前期初頭の土器についても神奈川考古のシンポジウム、東北北半から北海道の早期中葉から前期初頭にかけての土器を対象とした縄文文化検討会のシンポジウムなど多くの検討が重ねられてきた。このような各テーマごとに多くのシンポジウムが可能となったのは、各種開発事業に伴う著しい発掘調査の増加によって、従来と比較にならないほど多くの検討に多くの耐えうる資料が提出されたことによろう。

一方、関東前期各時期についても個別の細分が進められた。二ツ木式、関山式、黒浜式、諸磯b式、諸磯c式から中期初頭にかけた時期を含めほとんどの時期で型式細分が行われてきた。細分に当たっての手法は土器が持つ要素の組合せ、各要素の進化論的型式学に基づくため、細分が進めば進ほど細分された境は連続的になり、それぞれの大型式の境界も交錯し、連続性が強調されるようになった。また、それぞれの地域で独立的に細分が進められてきたため、対象の違いによる地域間での細分数のずれが生じるだけでなく、視点の違いなどから来る内容の不整合も著しい。

資料の増大は視点の多様化も生む一方、明らかだった型式の境や地域の境をみえずらしく、新たに相互の地域間の関係を考慮しながら検討する必要が生じてきた。このような反省もあり、群馬県水上で毎年開催されている縄文セミナーの会では、関東と周辺地域を含めた土器を対象としたシンポ

ジームが各地域の研究者を集め開催するようになった。このシンポジウムも既に10年を経過し、広域編年を視野に入れた土器研究の必要性が広く認識されるようになったといえよう。

埼玉の研究者が開催したシンポジウムでは関山式終末から黒浜式にかけた時期について地域を越えた広域編年と資料集成を兼ねて実施された。既定の枠から解放されることの重要性について多くの研究者に問題提起したといえよう。その成果の一端が大形菱形文のモチーフの視点を中心に東北南部から関東にかけた土器群を検討した論考（金子 1989 細田 1989）であり、地域の枠組みの中に固定しがちであった型式の持つ意味を再考するきっかけとなった。

筆者はこれらの大形菱形文というモチーフに触発され、前稿で菱形文あるいは鋸歯文の視点から東日本の前期を中心として各地、各時期にどのように表現されてきたかを検討した。

その結果、菱形文のモチーフは形を変えながら多くの地域、時期に広く採用されてきたかを明らかにできたように思う。ただこの菱形文が各地、各時期で必ずしも直接的系譜関係で跡付けることまでいかず、今後の検討課題として残った。また、各地、各時代の土器について必ずしも相対的年代関係を明確にせずに進めたところがある。

特に、福島県綱取遺跡の諸磯式あるいは浮島式系土器と北海道中茶路式を対比して並べた。しかし、現行の編年の位置は前者が前期中葉、後者が早期末に置かれ、時間的隔たりは大きい。本稿では関東の花積下層式から関山式まで基本の編年基軸として東北北半から北海道の土器を検討し、これらの持つ諸要素をとおして相互の関連、年代序列などを対比しようとするものである。

1 花積下層式系土器研究の現状と土器研究の課題

縄文早期と前期の境については、古くから花積下層式の成立に置かれてきた。これは関東では早期から前期への土器の流れが器面全体を覆う条痕文の土器から羽状縄文系の土器へと全く異なる施文効果へ変化することによっていた。

花積下層式土器は埼玉県花積貝塚で出土した中期の土器の下層から出土した纖維土器に対して名付けられたものである。早い時期に神奈川県菊名貝塚の発掘（桑山 1980）が行われた。良好な資料が相次いで出土し、長い間花積下層式の基準的な資料として扱われてきた。

菊名貝塚は広く知られているように下層と上層があった。下層では無文、条痕文などが主体で、ほとんど縄文施文の土器を含まず、逆に上層では羽状縄文の土器が大半を占めていた。このことから花積下層式細分の動きが早い時期から現れている。代表的な細分例は江坂輝也の梶山式、菊名式、下組式、野中式の4細分（江坂 1959）であろう。以後、研究の基礎となった。

花積下層式の組成は早期末からの条痕文、無文系、貝殻背圧痕文などの土器から羽状縄文系土器まで多様であり、各遺跡での組成比率の違いから段階差を見出そうとする研究へ進んでいった。1960年代の後半にはニューアーケオロジーの流れも加わり、出土遺物を数量的に処理することで客観化を図っていくとする気運が盛り上がった時期である。埼玉県目沼貝塚（庄野 1964）の報告でも層別の傾向についてグラフで表現された。また、神奈川県新作貝塚の報告（坂詰 1964 村田 1966）では出土量の多寡によって花積下層式の編年が提案された。

筆者もそのころ、卒業論文で早期末から前期初頭にかけての土器を扱った。検討の柱は報告刊行

の前であったが、岡本勇によって報告された神奈川県下吉井遺跡（岡本 1970）の無文系の土器に置いた。下吉井遺跡の土器は口縁部文様帯に波状文が沈線あるいは沈線による押引きで描かれたもので、従前知られていた花積下層式とは全く異質な土器であった。また、日本の考古学（岡本勇 1965）の中で関東担当の岡本勇が紹介した神奈川県紅取遺跡の東海系土器に興味を持ち、東海系土器と関東の土器との交流に重点を置いていたため、結果的には縄文系土器に言及することは少なかった。

当時知られていた縄文系土器は羽状縄文施文の明らかな花積下層式と東北の早期末の縄文系土器が存在する程度であった。当時前期は羽状縄文の出現をもって始まるとして一般的に考えられており、筆者も神奈川県白幡西貝塚での下吉井式土器に羽状縄文土器が共伴した例、すなわち下吉井式の新段階をもって前期の始まりと考えた。

現在では縄文系土器も羽状縄文だけでなく、撫糸文の存在も知られ、モチーフも帶状羽状だけでなく、菱形モチーフ、モチーフ上の縦鋸角菱形、単純な斜縄文など多様な土器群が知られるようになった。また、器形も様々な変異が存在し、必ずしも一連の展開していないことが明らかになつた。縄文系の尖底土器もかなりの量存在し、関東・中部でも相当な地域性のあることもわかつてきた。単純に羽状縄文をとる土器だけをみても、器形を加味すれば多系統の土器が交錯し、地域によって組合せにずれのあることがはっきりしてきた。

このような現在の研究状況からあらためて早期と前期の境を考えると、ほかの時期と同様、これまでのように単純に決めがたい状況にあるといえよう。

一方、早期、前期といった時代区分は、先にみてきたように羽状縄文の出現といった要素で考えられてきた。そこには新しい時代の到来、文化の画期といった内容が含意され、現在の時期区分完成者である山内清男が当初意図した機械的区分の仕様と異なったものとなっている。人の活動の痕跡を現在の目線から追っているわけであり、必然的に文化の流れをみるとことになる。当然変化の中に意味を汲み取るようになり、時期区分そのものにも文化内容の反映を試みることは必然的な結果といえる。研究に当たり文化進化論あるいは社会構成史などいざれの立場をとったとしても変わらない。これは、「過去の歴史や社会の再構成といった神学的ドグマ」（田村 1998）あるいは超越的態度としての「神の手」が内在していることにほかならない。

現在の考古学研究自体、日本考古学100年の歴史、すなわちその研究方法、その研究成果から免れないものであり、具体的な対象の分析に当たっていかに距離を置いて進めるかが問われている時代でもある。現今の時期区分の方は共通理解のための区分指標であり、その定義も極力意味を持たない指標的役割を期待して設けられる場合もでてきていている。

埼玉の中期末から後期後半での時期区分もこれまでの研究史を考慮し、称名寺式が関東で出現することで後期とするといった考え方方はこれまでの考え方と変わらないようであるが、そこにはこれまで込められていたであろう中期的世界、後期的世界といった考え方ではなく、あくまで分類概念であり、この基準で周辺地域との並行関係をみながら対比していくとするものである。

あらためて関東での称名寺式の出現をみても、神奈川県の海岸部、横浜周辺のみであり、他地域では断片的にその存在が知られているにすぎない。多くの地域では従前のいわゆる加曾利E式系の土器が大半を占め、称名寺式が主体となって構成されるようになるのは相当遅れ、更に短い期間と考

えている。この立場では、中期と後期との区分をどこに置くかはどの要素をとれば有意かを検討することであろう。筆者らはとりあえず研究史上の経緯から称名寺式の出現に置いている。

早期と前期の区分も同様であり、花積下層式の成立といつても花積下層式自体具体的にどの土器を指すかは研究者によって揺れのあるのが現状である。いずれにしてもこの段階の東日本全体各地の諸相は必ずしも明らかになっているといえる状況ではなく、まして相互の関連性というフィルターを通してみる研究も進んでいない。

現今の状況はまだまだ地域個別的研究が中心であり、相互の関連性を踏まえた全体の構図からそれぞれの地域、土器群のあり方をみる立場には距離があろう。当然、関東及び周辺地域を概観しただけでも地域による違いがあり、長野県では並行型式として塚田式（下平ほか 1994）、中道式（児玉 1984）など、関東と異なる型式名称が用いられ、関東との違いが認識される段階である。

いずれにしても花積下層式自体も含め、全体構図の中でそれぞれがどのような位置を占め、互いにどのような役割を果たしているかをあらためて検討する必要がある。また、南関東の花積下層式といつてもその成立過程、地域間の相違、成立の経緯なども一様でない。花積下層式は一つの体系だった構造でなく、多系、複数の構成原理が交錯した結果として花積下層式と呼称する土器が存在したと考えるべきであろう。

今進むべき方向は、研究者各自がこれに対してどのような全体的構図を描くか、また、どの立場で分析しているかを自覚しつつ検討することであり、このことで初めて多様な具体的な像が描き出せるようになると思われる。本稿では花積下層式の基準とみなされがちな東北北半から北海道にかけての土器について、これから多く提出されることが期待される構図の一つとしていさかでも検討の材料となればと、関東との並行関係を軸に筆者なりに考えてみたい。

そこで、まず最初に筆者の生活基盤である関東で考えた前期前半の序列を示す。これは細分が進んだそれぞれの区分法からすれば極めて大ざっぱなものである。今まで提出してきた細分論はそれぞれの分類基準では了とされようが、組合せの偶然性、個体差、地域差などを越えて成立しうるかはみえない。筆者自身がこれらの編年案に対して疑問に感じる部分があることから、大方が区分可能と考えられる段階とした。とはいってもここで示す段階の数及びそれぞれの組成も個人の思惟を越えるものとは思っていない。以下のように細分した段階は“私”そのものといってよい。

2 関東前期の編年序列の枠

(1) 花積下層式

かつて筆者が縄文系の土器を含めた花積下層式について検討したものに埼玉県舟山遺跡の報告（谷井 1980）がある。内容的には1970年に「内畑遺跡第1群土器について」（谷井 1971）を書いた当時とほとんど変わらず、早期最終末に下吉井式古段階を置き、前期に花積貝塚段階、菊名上層式段階、現在でいう新田野段階とした。

下吉井遺跡で代表される段階は、下吉井遺跡以降、山梨県の駿河堂遺跡（小野 1986、1987）で発見されたばかり、埼玉県を中心に富士見市打越遺跡（荒井ほか 1978）、大宮市宮ヶ谷塔遺跡（山形 1985）などで出土している。また、埼玉県荒川村下段遺跡（金子 1989）ではこの時期のまとまっ

た資料が出土し、この段階の大まかな内容が明らかになったといえよう。

下段段階（第1図1～8）

燃糸文、繩文による縦長の鋭角菱形文を描くもの。器形は屈曲がそれほどない円筒形となろう。口縁部は隆部あるいは微隆線による区画線で幅の狭い文様帯を作る。1では横方向の燃糸文、2の繩文の土器では口縁部文様帯を縦区画線が引かれ、その間に2条一単位の燃糸側面圧痕文を上下に配したものである。2の拓本図では縦菱形を意図していることがわかる。

4、6の帶状羽状の繩文施文も存在する。同一原体による縦、横回転により、菱形モチーフがとられる。以降の菱形モチーフの描出は異原体による施文で、横回転、帶状を意識したものである。繩文帯施文幅ごとに縦横と回転を変えるとはいって、結果として帶状化、菱形モチーフの両要素を共に体现したものといってよい。

これらに伴出した下吉井式は波状縁頂部を中心に結節沈線で渦巻文が描かれ、胸部との境には連続刺突文で刻まれた幅広隆部区画線が置かれる。8の口縁部は無文であるが、胸部との区画線は特に幅広い隆部である。5の土器はT字隆部のある波状縁の下吉井式系の土器と思われ、2～3条の燃糸側面圧痕文のみによる口縁部文様帯がある。区画隆部下は無文であり、下吉井式系土器の変形した姿であろう。下吉井式のありようからその古段階とされる。

なお、縦横回転で表現された帶繩文による菱形構成の繩文系の土器については当初一段階新しくなると考えていたが、遺跡斜面での出土状況からこの土器のみを取り除く理由が見当たらず、一括性の高いものと考えた。

花積貝塚段階（第1図9～24）

花積貝塚7号住居跡（下村ほか 1970）を基準と考えられてきたものである。資料的にはすべて破片であり、混在の可能性がないわけではないが、下吉井式新段階の土器が出土し、無文地に描かれる燃糸圧痕文による渦巻文、異原体による菱形文を描く帶繩文、内面の条痕文、繩文の存在から、次の花積下層式の典型である菊名上層段階以前に置かれる土器と考えられる。11のように縦帶状の口縁部をとるものも存在するが、確実にこの時期とするにはためらうところがある。また、わずかであるが燃糸施文の土器もみられた。

この段階の資料的不足を補うため、18～24の土器を加えた。18、19は胸部に燃糸文による縦鋭角菱形モチーフを描出するもの。前段階のこのタイプは口縁部文様帯の幅が狭いのに比べ、幅広となつた多条側面圧痕文による鋸歯状モチーフがとられる。次の菊名上層段階では口縁部文様帯、特に縦帶状口縁部に広くみられるものであり、既に地文燃糸文の段階で存在することを示す好例である。18の口縁部文様帯は燃糸圧痕文による菱形モチーフが展開する例である。文様帯の幅は途中に一部区画線の引かれる可能性があり、復元図より若干幅が広くなるかもしれない。前稿で扱った某准福島県岡橋遺跡例（先崎 1985）のモチーフからの変形とみなせるものである。

20、22は異原体による帶状施文による菱形構成をとるもの。20は埼玉県タカラ山遺跡例（奥野 1987）で、無文地の幅広口縁部文様帯に一本単位の側面圧痕文が施文される。22の口縁部は小波状

の幅の狭い口縁部文様帶。地文縄文のみであり、前段階1と同系列に近い。

23、24は下吉井式系の土器で、23は口縁部区画線まで沈線化している。24は連弧に波状沈線を組み合わせたものである。

なお、ここで扱った花積段階の資料は花積貝塚例以外、それぞれの持つ特徴から個体として抽出した。この段階とされる住居跡例はかなりあるが、多くは破片資料のためここでは数少ない図化されたものを選んだ。それそれが共時的に存在するという確実な根拠はないが、前後の時期の土器様相と対比して集めたものである。

菊名上層段階（第1図25～29）

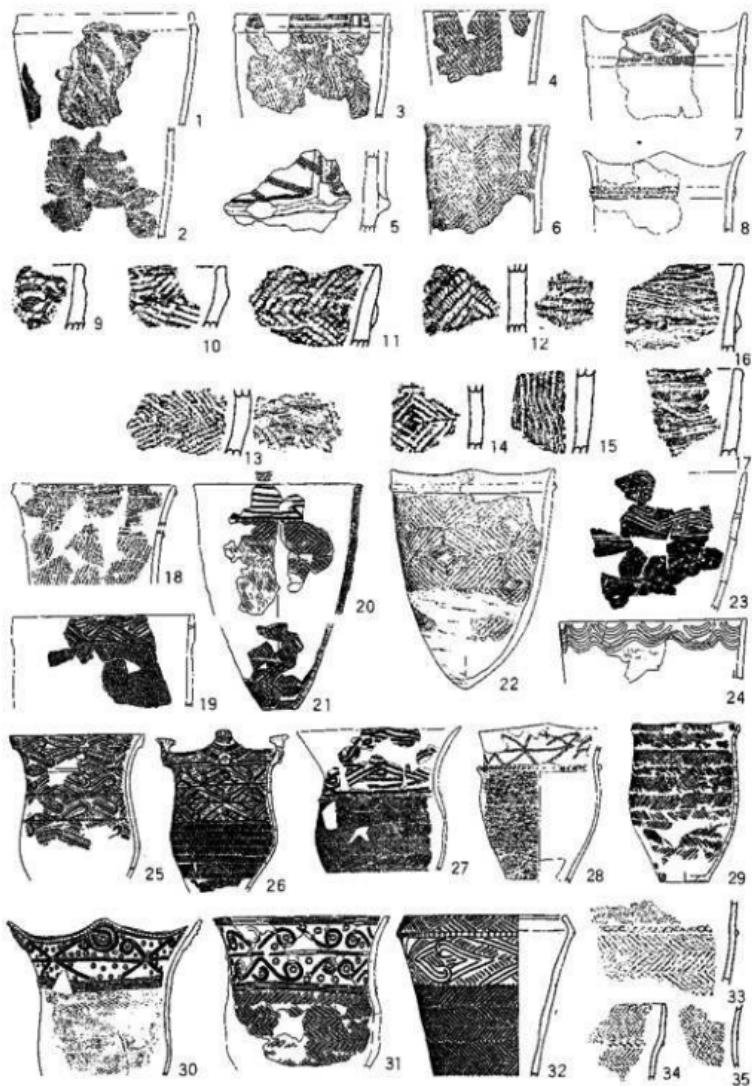
典型的な花積下層式とされてきた段階である。この段階は前稿で検討した菊名貝塚例で示されたように、3段ないしは4段を基本とした鋸歯モチーフを重ねたものが主流で、鋸歯を対称の対として合わせることで菱形構成となることを明らかにした。鋸歯の頂部に渦巻文が置かれるが、個体により渦の巻きの強さが異なる。群馬県三原田城遺跡例の場合も同じように胸部で3段の帯状構成がとられており、鋸歯頂部の巻きは円文に近いほど強い。巻きの強さは地域性のある可能性が高い。

花積下層式を象徴する特徴は撚糸側面圧痕文による藤手状のモチーフであった。あらためて具体例を沙猟してもそれほど多いものではない。このような花積下層式のイメージは「日本の考古学」で花積下層式例として図示された菊名貝塚例がそのもとにあらわる。3段構成であることは同一であるが、鋸歯文が相互に入り組み、渦巻文も緩んで本来の鋸歯のイメージからは離れたモチーフに変形していた。筆者が提案した鋸歯文帯重層の視点からみれば、鋸歯文からの変形であることがわかる。當時藤手モチーフが花積下層式の象徴的存在であったのは完形品がほとんど存在しなかった当時としてはやむをえなかったといえよう。

27～29は打越遺跡例で、それぞれタイプが異なる。27は多条の側面圧痕文で菱形構成をとるもの。28は1条単位で菱形を描く。幅広口縁部の中間で引かれた区画線は隆帶などと同様な効果を果たす。前稿で検討した福島県羽白D遺跡例（鈴鹿 1987 1988）では多重で、霧開気はよく似ている。27では鋸歯より菱形を意識しているように思える。中央には横線があり、横区画線の痕跡を残している。25、26が刻目列で埋められるのに対し、いずれも側面圧痕文間に無文地、索文地に描線のみであることは、撚糸側面圧痕文が採用される宮城県梨木畑遺跡例（相原 1994）など東北の古い一般例からの流れにあるといえる。29は縁帶状の口縁部を持つ全面帯状羽状縄文の土器である。

この段階の胸部は図示した例からわかるように、異原体による帯状羽状縄文が中心となる。しかし、関東北部や長野県などの埼玉北部で近接する地域では事情が大きく異なり、同時期と考えられるものであっても菱形構成が普遍的に存在する。特に群馬県五日牛清水田遺跡（藤巻 1993）では縄文尖底土器が圧倒的に多く、器形も変化の少ない細身の円筒形である。胸部では菱形を構成する羽状縄文が圧倒的に多い。撚糸側面圧痕文、羽状縄文などの要素で花積下層式をくくるとすれば同一と考えることもできるが、その内容となると多くの点で差異のあることは否めない。

長野県の群馬県よりの御代田町塚田遺跡、長門町中道遺跡でも類似した例が出土しており、塚田式、中道式と花積下層式と別の型式名称で呼ばれている。いずれにしてもこの段階の関東周辺を含



第1図 花積下層式の年代序列

1～8 下段遺跡 9～17 宮ヶ谷塔遺跡 18 前原遺跡 19 神山遺跡 20、21 タタラ山遺跡
 22 下段遺跡 23 宮ヶ谷塔遺跡 24 中耕遺跡 25 黒川東遺跡 26、33～35 三原田城遺跡
 27～29 打越遺跡 30 桑山遺跡 31 堀越中道遺跡 32 足利遺跡

めた構図をまとめるにはまだまだ課題が多い。

ところで、菊名貝塚では貝層堆積以前に無文地、あるいは条痕文のみのもの、更に下吉井式新段階と考えられる土器など非繩文系土器が存在し、貝層では繩文系土器が主体とし出土していた。この繩文系の土器は花積下層式の典型とできるものであり、この層位と出土土器との関係に基づけば、無文、条痕文、下吉井式の直後に繩文系土器が成立したと考えられる。したがって、花積貝塚段階の第2段階相当と考えられよう。

菊名貝塚の下吉井式例をみれば、下吉井遺跡遺跡例より明らかに新段階であり、このことを裏付けている。また、花積貝塚段階を西関東で涉獵してもかつて筆者が使った白幡西遺跡例のほかほとんど知りえなかった。菊名貝塚下層段階で繩文系の土器が全く存在しないとはいえないが、西関東では花積下層式直前は菊名貝塚貝塚形成以前とされる土器を置くのが適切であろう。

新田野段階（第1図30～32）

花積下層式の最終段階で、野中式などを含めて考えられる段階である。下村克彦（下村 1981）、谷藤保彦（谷藤 1988）などの論考があり、議論の多い時期である。後続する二ツ木式のからみもあり、その境を決めるとはなかなかむずかしい。また、前段階の典型花積下層式でも相当な地域差のあることが予想され、これとの区分も簡単ではない。千葉県新田野貝塚例（武井ほか 1975）にみられるように胸部の地文繩文が幅の狭い繩文帯による羽状構成をとる土器として一括した。

30は波状線例で波頂部に接して円文が置かれる。通常は26からの変形とも考えられる弧線でつなぐが、基本からは外れている。胸部も28からの系譜上にあり、描線一条で大きな鋸歯を描くともみえる一方、「×」印の中間に横線が引かれたとも解釈できる。全体のモチーフ展開からは後者が意識されているよう。胸部との区画線が2条隆帶であることはこの時期を象徴するといわれている。31は平線例で、2段構成で大きく展開した連続鋸歯といえる。渦文を持つ各単位は独立化している。これも25、26の描線間を刻目列で埋め尽くす例よりは28例の描線のみの例に近い。区画内を円形刺突文で埋める手法であり、東北南部起源と考えたほうが適当な例である。

これに対して埼玉県足利遺跡（鈴木ほか 1980）の32は、描線間を刻目列で埋めるという25、26の系譜上の要素を持つ。しかし、口縁部の幅広い文様帶では区画線が引かれず、全体で菱形構成となっている。口縁部先端が内屈すること、内屈した口縁部と直下の幅広な文様帶の境となる屈曲部に刻目列が置かれることなどが特徴といえよう。これまで描線間に刻目列が置かれることから、菊名上層段階とすることが多かったように思うが、関東で類似例を探すとほとんど存在せず、その広がりは東北全体に通る。口縁部文様帶上端の鋸歯文列、整然たる胸部の羽状繩文も考慮し、通常考えられているより一段階新しい、新田野段階に置いた。

33～35は区画線隆帶が細く、連続して刻目が並ぶ。胸部の繩文は帶状羽状繩文である。各帯幅は極端に狭い。34のように口縁部の形態は縁帶状口縁の名残である。器壁は同一の厚さであり、新潟県布目遺跡例（小熊ほか 1994）に相当する土器であろう。三原田城遺跡（谷藤ほか 1987）は群馬県北部であり、長野県千曲川水系を経由した新潟との関連で作られた土器と考えられる。時間的序列は新田野段階に後続する可能性が高い。

(2) 二ツ木式、関山式

関山式については関山式本体と前段階二ツ木式の問題がある。関山式に先行する二ツ木式は千葉県向台二ツ木貝塚（松浦ほか 1998）資料を基準資料として名付けられたものである。花積下層式新田野段階、後続する関山式古式との区分の問題があるが、関山式を帶状の異なる縄文施文が重層した土器と考え、埼玉県関山貝塚例（庄野 1974）を出発と考えたい。

二ツ木段階（第2図1～8）

埼玉県深作東部B23住居跡（黒坂 1984）、埼玉県貝崎貝塚D5住居跡（庄野 1978）に代表されよう。文様帯は一段が普通で、花積下層式と同様、連続2段となるもの、縄文帯を挟むもの、底部周辺に幅の狭い文様帯を配するものがある。図示した土器の段階で複数化を内在している可能性がある。ただ、縄文帯の基本は幅を極端に狭くした、黒坂植二のいう幅狭等間隔施文である（黒坂 1989、1993）。先端ループが多く、羽状、単方向がある。異なった原体、施文幅の縄文帯を挟むものもあり、菱形構成を意識した文様帯を挟む。これらの縄文帯は一原体の幅でなく、一定の幅を持つ。

波状線を持つ土器は、前段階とした群馬県芝山遺跡（谷藤 1993）例に代表されるタイプの延長の器形である。波頂部を中心とした基本的モチーフも前段階からの延長とできる。1と2では変化の方向が異なり、区画内を埋め尽くす方向と基本モチーフの変化形態と理解できる2がある。

なお、前段階群馬県堀越中道遺跡例（山下 1997）で採用された族手文は、独立化の傾向が一層顕著となる。後続の関山貝塚段階になっても1のような羊角状になることが多い。

関山貝塚段階（第2図9～16）

波状線、平縁とも器形的には前段階の延長にあり、大きく異なるのは胸部縄文帯のあり方である。黒坂のいう異間隔横帯区画縄文帯の採用である。縄文帯上半にループ文を重ねて縄文帯としたものが多い。異原体の組合せによる菱形構成となる縄文帯が主流となる。縄文様帯の区画はコンパス文で行うことが普通である。12のような特殊な結節が区画線の役割を果たす場合もある。このほか特殊な結節が器面全面覆うもの、正反の合による異斜縄文で菱形構成をとるもの、羽状撚糸文施文のものなどがある。

関山貝塚例は床面から覆土上半まで多量な土器が出土し、覆土は焼土、灰層、特定の貝のブロックなど複雑な堆積状態であった。当然覆土上半まで埋め尽くされるまでに時間的経過があることは明らかであり、含まれた土器群に時間幅のあることは当然である。その中に我々が時間差として識別できる土器群が含まれているかが問題となる。関山貝塚例に型式学的分類から時間幅が存在するという主張はそこから来るであろう。その可能性は全く否定できない。

このように遺構出土土器に対する一括性の保証が困難なのは、時間やその後の自然、人工的な營為など無数の物理的な条件の入り込む要素が無数に存在しうるからである。これを完全に解消する直接的な手立ては存在しない。型式学的分析は有力な方法ではあるが、これは我々の立場からの規定であって、存在するであろう可能性を網羅したものとなっていないというのが筆者の現状認識である。今果たすべきは、ノイズがありながらも一定の時間幅に可能性高い土器群の量的増加と相互

の重ね合わせよって抽出していくしかないと考えている。

谷畠段階（第2図17～24）

関山貝塚例と比較して明らかに新しい一群として埼玉県谷畠遺跡例（村田 1997）がある。波状縁例は欠けていたが、平縁で、縄文帯施文のあり方が特徴的であったことから取り上げた。口縁部文様帯を持つものに20～23の破片がある。半截竹管のコンバス文、貼瘤の存在することがわかる。

複段のループ文は区画線として使われ、文様帯を区画する。縄文帯一帯は異原体による羽状縄文であり、結果、菱形モチーフとなる場合もある。菱形の中央にループ文帯を区画線として置いたとみることができるものもある。関山貝塚段階に比べ、区画線の段数が著しく多くなっているともいえる。区画線は複段ループのほか、縄文原体末端のループ、コンバス文など様々である。

17の底部に接する最下段近くまでループ文帯があり、谷畠遺跡例は口縁部文様帯と胸部文様帯といった構成から器面全体を多帶横分割する傾向の一端と進んでいることがわかる例である。

なお、24の正反の合の菱形構成の例は15に比べて整然さが欠けており、ほかの土器と構成原理を異にすると考えられよう。ここで扱われた例はこの段階の一部であり、全体像を示すものではないことは当然である。

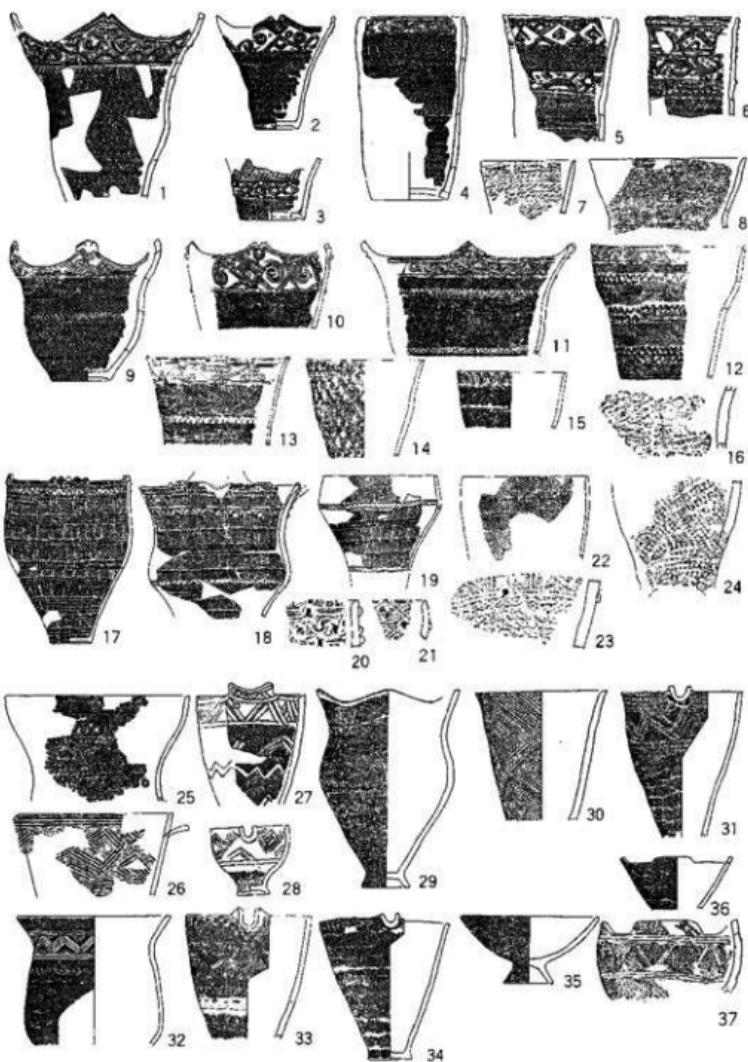
井沼方段階（第2図25～37）

埼玉県井沼方遺跡（小倉 1980、1983）、埼玉県大古里遺跡（黒坂 1981、小倉 1986、中村 1991、1992）など埼玉県浦和市にある遺跡で象徴される。組紐による縄文施文の主体となり、文様帯が著しく低下する。羽状縄文、ループ文を持つ縄文も減少し、胸部の一帯化が進む。口縁部文様帯、胸部文様帯に還元されるといえる。25は羽状縄文、ループ文帯、コンバス文が重ねられ、前段階からの系譜上にあるが、量は減る。26の片口土器の口縁部文様帯も前段階の系譜を引く。胸部は組紐の一帯となる。31も口縁部文様帯があるが、ループ文による鋸歯を描く。いずれも地文があり、これまでなかつたものである。前段階とは使われている縄の違いが大きく、少なくとも埼玉県南部に絞れば区分することにそれほど困ることははない。

32も地文組紐縄文で、口縁部文様帯に鋸歯文帯が置かれるが、口縁部上端から文様帯まで帯状縄文帯がある。この構成をとるのは関山式系には存在せず、神之木式、有尾式系土器にみられる。この段階で有尾式系土器が出現している可能性も考えられる。周辺土器群との並行関係を探る要素の一つとなる。

このほか、この段階で特徴的な要素に片口、高台あるいは脚付き土器の多出、皿、鉢など深鉢以外の様々な機種の出現することが挙げられよう。口縁部に板状把手（36、37）、U字板状把手も特殊なものもある。また、この段階の器形には前段階を継承した器形があるほか、胸部下半で極端に絞り込んだものが多いことも特徴といえよう。この器形は片口、注口などの特殊な器種に多いが、高台付き深鉢などでも採用されている。

また、この時期の器形は1、9に代表されるように口縁部文様帯下で括れ、胸部が膨らむ一般的なものも存在するが、円筒形で胸部下半を細くした器形も目立つ。この器形は花積下層式段階では



第2図 ニツ木式、関山式の年代序列

1～6 深作東部遺跡群 9～16 関山貝塚 17～24 谷畠遺跡
25～31、33、35～37 井沢方遺跡 32、34 大古里遺跡

ほとんど例のないものであり、関山式段階になって器形の一タイプとして一般化すると考えられる。関山式が単純に花積下層式の延長ないことを示す一例である。

以上、花積下層式から関山式までの展開をみてきたが、花積下層式4、二ツ木式、関山式4となり、現在、二ツ木式3、関山式は5の8段階とする意見もあり、筆者の段階区分は細分されてきた段階数に比べると極端に少ない。これらの細分に対する諸見解はそれぞれ個別の説明原理があり、その視点からの段階は識別が可能であろう。しかし、どの細分案が個体差、地域差、組合せの偶然性、他地域での土器変化とのすり合わせなどを越えているかについて、筆者自身が納得できるまで十分消化していないため、ここでは大方が納得できると考えられる最も少ない段階区分をとって解説した。それでも個々の具体例となると筆者自身揺れがあり、検討すべき点は多々あるが、とりあえずこの段階数を前提として周辺地域の土器を考えてみたい。

3 花積下層式系土器の広がりと各地域で占める位置

花積下層式を象徴するものは、縄の原体圧痕文と羽状縄文がある。縄文土器の諸特徴の中でも最もわかりやすい存在であろう。したがってどの地域にあってもこの両者が揃う縄維土器であれば花積下層式系と考えられることが多かった。東北北半から北海道南部にかけた地域は多様な縄文施文系土器が知られているが、この両要素を持つ土器の発見により関東地方との関係で論議されることが多くなった。それにもかかわらずこの東北北半、北海道南部地域は縄文施文系土器の源郷土として位置付けられてきたため、花積下層式系土器を搬入型式として別枠扱いとされることが多く、内容に立ち入った検討はそれほど行われなかったのが実情であろう。

羽状縄文系土器で注目された青森県長七谷地貝塚Ⅳ群土器（大湯ほか 1980）の場合でも花積下層式並行と位置付ける意見がほとんどであったであろう。また、北海道美沢3遺跡（遠藤 1989）での羽状縄文と燃糸圧痕文による菱形構成の口縁部文様帶を持つ土器でも同様な扱いで、イコール花積下層式並行とされてきたように思う。

ひるがえって関東の花積下層式をみると、段階の数が少ない筆者の場合であっても4段階が存在し、これに早前期の時期区分の議論も加わることから、対比にあたっては両面を考慮する必要がある。東北、北海道で花積下層式だから前期初頭であるとすることは、大まかな意味でそのとおりであるが、関東との並行関係を考慮して対比する必要があり、厳密に前期を開始する土器がなにかを決めるには関東との連動から考えざるをえないことはいうまでもない。

縄の原体圧痕文の側面からながめてみると、東北北半では赤御堂式（工藤ほか 1989）があり、早船田5類（佐藤ほか 1957）、東北南半では梨木烟式があり、船入島下層式などもこれに当たる。口縁部の条痕文の素文帯に縦、斜めなど縄原体の押圧をするものである。器形的にも尖底から大きく鉢状に開いた土器であり、纖維含有の有無を除けば共通性が高い。縄原体圧痕文そのものはこのあたりに起源があろう。これに対して青森県表館遺跡（三宅 1985、三浦ほか 1989）では原体が2本単位で横展開し、波状、同心円状モチーフを描くと思われるものに110号住居跡例がある。

(1) 文様帶の全体構成と羽状繩文からみる流れ

表館遺跡110号住居跡（第3図1～8）

本例は胸部が等間隔羽状繩文となる円筒状に近い土器と早稻田5類が住居覆土から出土したものである。通常早稻田5類系土器は早期末に置かれることから両者を混在として扱うか、羽状繩文の起源が北海道、東北にあると考えることから花積下層式の起源的な土器として位置付けてきたのであろう。一緒に出たからといって完全な共伴関係にあるとする決定的な証明が困難であることは先に述べたとおりであるが、直前型式が北海道の東鉄路IV式、あるいは東北北半の赤御堂式とするだけでは器形、施文原体など多くの点でその間に系譜関係を読み取ることはできない。

あらためて1の撫糸圧痕文の土器をみると、繩文帯の幅がやや狭く、また、4では原体末端のループ文が3段あり、口縁部上端の一帯となる文様帶が形成されている可能性もある。底部に繩文施文された土器の存在も検討材料の一つである。これらを考慮し、関東の変遷を考慮して対比すれば、口縁部は古い要素を残し、胸部羽状繩文などの要素は菊名上層段階以降、新田野段階に近い存在であり、古くても菊名上層段階以前に置くことができないといえる。福島県源平C遺跡（芳賀 1980）には類似する口縁部文様帶の土器がある。胸部が撫糸文であることで異なるが、羽状繩文に代えればよく似た土器となる。

ここでは本例の花積下層式系土器と早稻田5類との共伴関係を認める立場であるが、その是非は東北北半の各系統土器群の消長を全体的構図の立場から検討するしかないであろう。

繩体圧痕文のみられるもののうち、区画線として縦に密接して押圧されたものがある。VI群と分類され、赤御堂式とされるものである。纖維の混在がないか、微量にしか含まない土器である。口縁部文様帶のあり方からすれば、梨木畠式に近い。明らかに口縁部と胸部の区画線の役割を果たし、口縁部文様帶のあり方を含め一定の発達を遂げたものと解釈できよう。12は早稻田5類に分類されている土器であるが、区画線が文様帶として独立した扱いを受けていることがわかる。

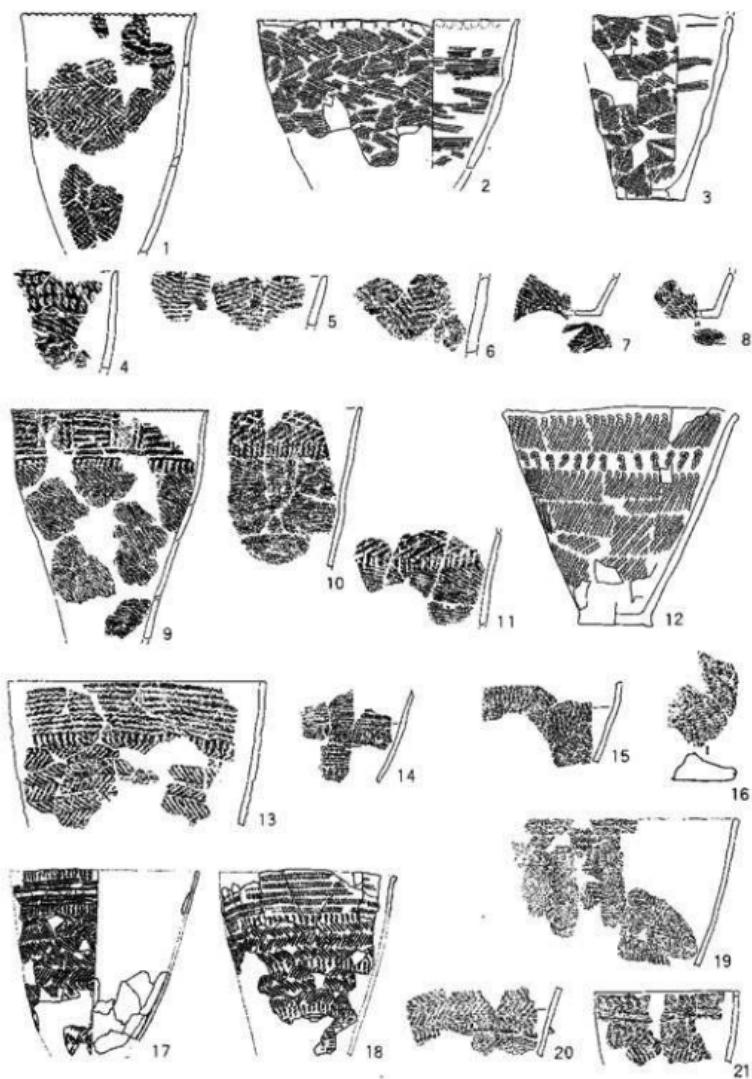
表館遺跡にはこのほか、9の口縁部文様帶に相似した例があり、花積下層式と異なる撫糸原体の発達がみられる。

武佐川1遺跡（第3図13～21）

北海道地域で羽状繩文が採用された土器に美沢3遺跡などの花積下層式系とされる土器がある。後述するように、これらの土器は花積下層式系の在地の土器で、東北北半との脈絡から理解できるものである。北海道の従前からの系譜上にはない諸要素で構成されており、搬入的存在である。羽状繩文という要素に限ってみても東鉄路式系土器の基準資料北海道東鉄路貝塚（河野ほか 1962）の場合でも少量みられる程度で、既知の資料では必ずしも多いものではなかった。

近年道東の鉄路市の武佐川1遺跡（松田 1998）の報告書が刊行され、まとめた羽状繩文の多用された土器群が報告され、東鉄路III式土器の実態が明らかになった。

13～16が17号住居跡で、複数の横の繩圧痕文列、縦の短圧痕文列の土器、斜め回転を含めた粗製的な繩文のみの土器、底部に繩文施文されたものもあり、時期を考える材料を含んでいる。13の口縁部文様帶と胸部繩文帶を区画する縦原体圧痕文列は、ほかの系列に連動してみることができ、相



第3図 東鉄路川式及び関係土器(1)

1～8 表館遺跡110住

9 表館遺跡104b 土壌

10、11 表館遺跡117住

13～21 武佐川1遺跡

互の関係を知るうえで注目すべき存在である。

13は表館遺跡の9～12と対比すると、ほぼ同一の構成であることがわかる。口縁部文様帶は複数の撚糸圧痕文列、区画線として縦の短圧痕文、胴部は単純な繩文の代わりに幅狭の羽状繩文となる。この羽状繩文は1の花積下層式系に比べて、繩文帶の短いこと、施文の整然としていることが特徴である。13でみる限り胴部の多段化していないものが存在する。17のような可能性もあるが、一般的には18のような短圧痕文が底部までの間に複数施文される。

17は短圧痕文列が組紐圧痕文列を挟んで2段ある。下段は胴部との区画線的役割を果たしていると思われるが、上端の圧痕文列は4のループ文列、12の短圧痕文列のうえにある繩文帶と同様な効果を意図しているように思われる。このほか、隆帯の加わるものも存在する。

なお、圧痕文の繩は花積下層式にある撚糸側面圧痕文のほか、絡条体、平組紐と多様化している。

このように武佐川1遺跡例を表館遺跡例と対比してみると、全体の構成は相互に関係の近いことが予想される。これまで東釧路Ⅲ式は早期末に置かれており、今回の想定を逆にたどって東釧路Ⅲ式から花積下層式系へと変遷するという解釈もありえる。しかし、関東での変化の方向からは表館遺跡例に後続し、更に東釧路Ⅲ式系では独自の変化を遂げて帯状化へ一層進むとみられよう。

1～7はこの帯状化が進んだ例である。1～4までは帯状化しつつも繩圧痕文列の間はまだ繩文帶で羽状繩文となる例もある一方、繩圧痕文列間が短圧痕文列で複数化の進むものもある。

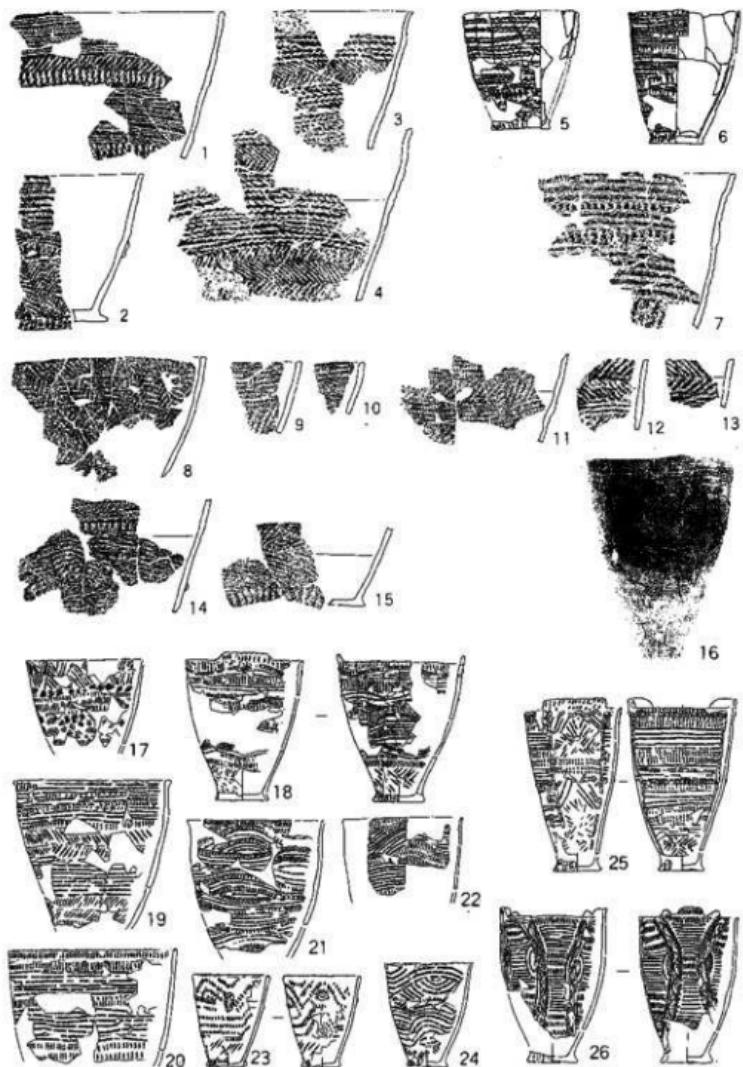
ニナルカ遺跡（第4図17～26）

一方、道央苫小牧市ニナルカ遺跡（佐藤ほか 1998）でも東釧路Ⅲ式系の良好な資料が報告された。17～26を選んでみた。これらをみると、多段化の著しいことがわかる。繩圧痕文列間に羽状繩文の存在するものもあるが、ほかの場所では同一原体を横に重ねるものがあり、羽状繩文を中心にして置いた時期でないことがわかる。波状と対弧モチーフを組合せ例（21、22、23、24）も多出する。この遺跡のⅢ式には中茶路式に通じる諸要素があり、トドホッケ式のモチーフとも共通する点もある。第5図13ほかの表館遺跡例にも繩側面圧痕文列例があり、脈絡をたどれる多くの土器が存在する。

このほか、ニナルカ遺跡では縦区画線の加わるものがある。大単位2単位構成、板状把手、板状把手両端からのびる2条の縦区画線によって正面観が創出される。縦区画線についてどのように考えるべきか方違はないが、大単位2単位の出現は、先に説明した関山式井沼方段階の第2図36、37の把手に共通し、前期土器群の主要な要素である。

いずれにしても、ニナルカ遺跡例は武佐川1遺跡例に含まれていないものが大半であり、両者を関東の見方である羽状繩文の流れで比較すれば、武佐川1遺跡からニナルカ遺跡の土器へと変遷していると考えられる。

以上の検討を踏まえ、武佐川1遺跡の類似例を分布の観点からみると、道東の釧路市周辺地域でしかほとんど存在しないといえよう。武佐川1遺跡例と最も近い構成をとる土器に第4図16の標茶町飯島遺跡例（小林編 1989）がある。第3図9の表館遺跡例とほとんど同じ文様帶構成、文様モチーフであり、胴部下半及び底部周辺に短圧痕文列が2段置かれており、東釧路Ⅲ式としてよい土



第4図 東郷路山式及び関係土器(2)

1~15 武佐川1遺跡

16 飯島遺跡

17~24 ニナルカ遺跡A貝塚

25, 26 ニナルカ遺跡

器である。しかも胸部のあり方などはより表館遺跡例に近いといえよう。

櫛茶町は訓路市の北の内陸にある町、道東そのものといってよい地域で、武佐川1遺跡と共に通する基盤を持つ。武佐川1遺跡古段階の土器は道東の土器であり、道央での出現は武佐川1遺跡新段階あるいはニナルカ遺跡段階と考えてみたい。

ところで、ニナルカ遺跡例を含め、これら東訓路III式を道南地域ではそれほど見出すことができない。大沼は北海道鬼沢1遺跡などを挙げている（大沼 1989）が、図示された土器に、武佐川1遺跡やニナルカ遺跡に相当する土器は見当たらない。北海道奥尻島松江遺跡（佐藤 1983）では縦の縦短圧痕文列、やや長い平組み組紐圧痕文列などある。短圧痕文列は東北北部、一方は中茶路式系で考えたほうが適切なように思う。

以上、花積下層式のうち、全体の文様帶構成、羽状縞文のありようから関連すると考えた土器を検討してみた。これらを関東での流れを参照して年代の対比をすれば、武佐川1遺跡古段階は少なくとも新田野段階以降、二ツ木式段階ぐらいまでが想定される。

（2）東北北半花積下層式系土器からの流れ

東北北半で花積下層式系土器に著名な存在に長七谷地Ⅲ群土器がある。丸底、羽状縞文をキーとする。丸底の土器の器形はこの時期、この地域の独特のもので、器高に比して口径が大きく、胸部から底部にはゆるやかに湾曲して移行する。赤御堂式の場合は鋭角的な底部から直線的に口縁部に至ったり、口径が小さい円筒形の器形とは明らかに区別される独特的のものである。器高が低いことから腕状に近い器形ともいえる。これまで前期に分類され、同系列の器形をとるものに中野式、網文系の土器があるが、ここでは長七谷地Ⅲ群土器、東訓路IV式を中心検討する。

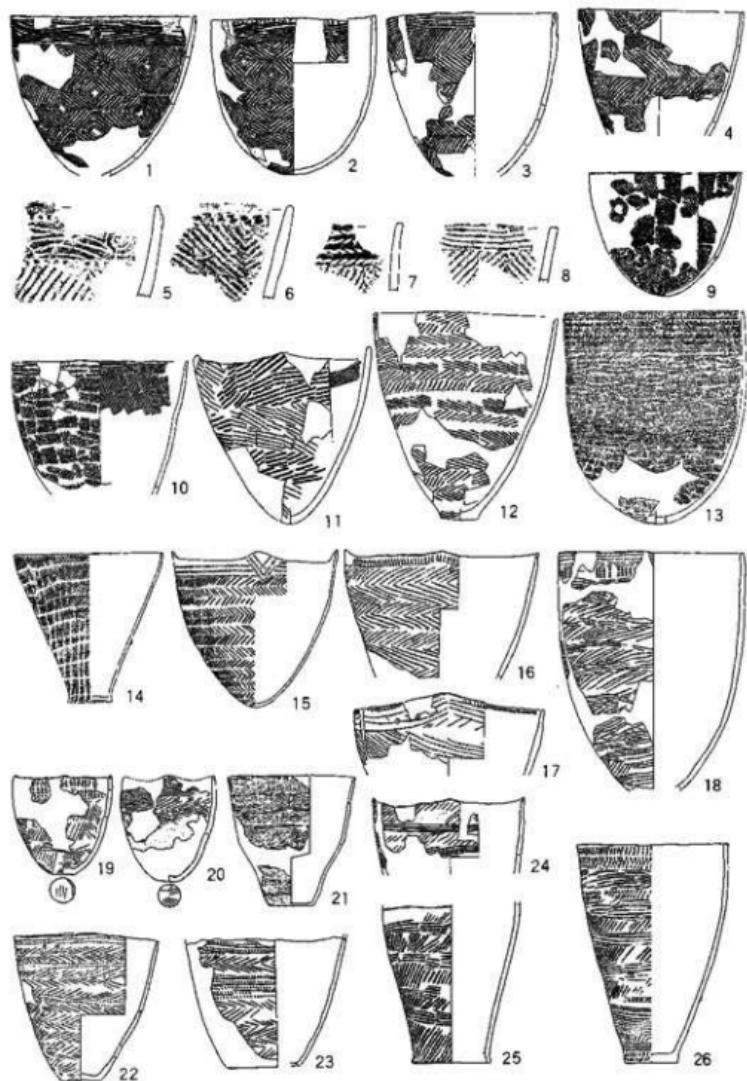
長七谷地Ⅲ群土器（第5図1～8）

撚糸圧痕文による口縁部文様帶と羽状の縞文帶という構成は、第3図1の表館遺跡例と同様で、関東花積下層式と同構成となるが、器形は全く異なる。また、羽状縞文は菱形構成が主流であることも表館遺跡と異なる。撚糸圧痕文の文様帶は菱形モチーフで中心に円文が置かれる。長七谷地貝塚では狭い無文帯下に刻目隆帯で以下縞文帯のもの、並列した撚糸圧痕文列のみのものがあり、口縁部の縁に条の横走する文様帶が置かれる。

これに対して、北海道美沢3遺跡では長七谷地Ⅲ群そのものの器形をとる土器が出土しており、口縁部の菱形モチーフを沈線群で描いた別個体も存在する。また、縞文の条が横走する文様帶を持つ器形のわかる土器もある。この土器では条の崩った帯状羽状縞文であり、菱形効果を描き出す羽状縞文が主流といえ共存している。

明らかな口縁部文様帶を持たない全面縞文施文の土器で羽状構成となるものに美沢3遺跡4や表館遺跡の9、10がある。9では口縁部のみ撚りが異なって羽状となるが、以下は単方向の縞文帶で、表館遺跡では単方向の縞文の例も多い。

ところで、ここで扱った土器は羽状縞文ということで、ほかの土器と明らかに区別できる。このタイプのみで単独で存在するのか、あるいはほかのどのような土器と共存するかは今までの材料か



第5図 東鋼路IV式及び関係土器(1)

1~4、16~20 美沢3遺跡
 5~8 長七谷地貝塚
 9~13 表館遺跡
 21~23 納内6丁目付近遺跡
 24~26 川上B遺跡

ら決定的なものは見出せなかった。東北北半の長七谷地貝塚と表館遺跡を対比すると、表館遺跡には明瞭なⅢ群土器がほとんど存在せず、表館遺跡では欠けている可能性が高い。東北北半での変遷を知る今後の検討材料となろう。3の出土した美沢3遺跡H-15遺構では覆土中から単軸羽状撚糸文が出土している。いずれも破片であり、直接的に共存関係を示す材料と決めるのはむずかしく、今後検討材料の増加を待ちたい。

さて、これらの土器の時期を関東の土器に対比すると、その特徴から菊名上層段階には存在する要素がなく、新田野段階ぐらいが相当しよう。表館遺跡の13も長七谷地Ⅲ群に通ずる器形を持ち、撚糸圧痕による波状と対弧を多重に重ねた文様帶を口縁部繩文帯下に置く土器である。量は多くないが、東北南部地域まで分布する。13は口縁部に羽状繩文がみられる数少ない土器で、繩文帯の幅が極めて狭いことが重要な要素である。また、口縁部上端の刻目列の存在を合わせてみると、新田野段階以降の存在を考えたい。

東鉄路Ⅳ式系土器（第5図14～第6図）

長七谷地Ⅲ群と同タイプの器形を持つものに東鉄路Ⅳ式が存在する。道央を中心に道南へ広がる土器群である。北海道では東鉄路式諸型式をすべて早期末に位置付けられていたことから、長七谷地Ⅲ群土器の器形を東鉄路Ⅳ式からの影響で成立したと考えられてきた。遠藤香澄のⅣ式3細分はこの考え方を受け進められたものであろう（遠藤 1964）。

一方、大沼は早稲田5類を東鉄路Ⅳ式終末、ないしはその後に位置付けた。しかし、表館遺跡の成果（第5図11、12）、更に名久井文明（名久井 1979）や林謙作（林 1984）が指摘したように、変化のありようには脈絡がたゞれず、周辺地域との整合性もとれていない。

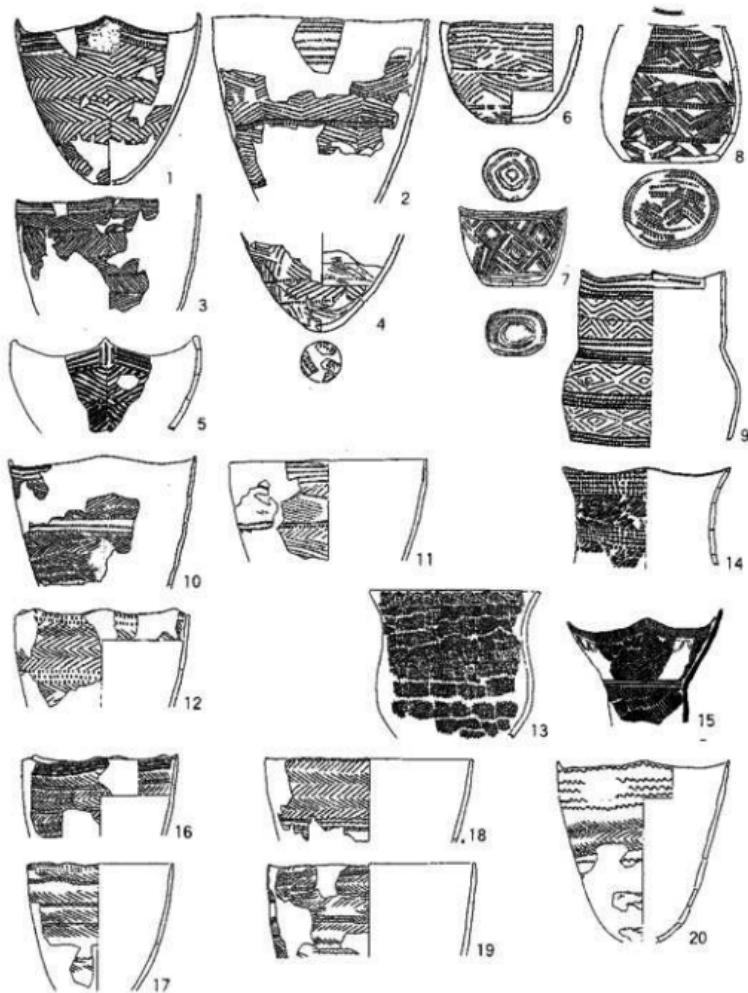
大沼のいう早稲田5類が具体的にどの土器を指すか不明であるが、表館遺跡例の早稲田5類系土器と認めるにすれば、早稲田5類という平底、直線的に開く単純な器形で、東鉄路Ⅳ式と同系の器形をとる長七谷地Ⅲ群、更に前期繩文尖底土器と連なることになり、矛盾が存在することになる。

東鉄路Ⅳ式系土器は胴部の羽状撚糸文で定義される。出土量は多く、変異の幅も大きい。文様帶の構成からみると、表館遺跡のような口縁部に文様帶を置かない土器も少量存在する。多くは口縁部上端に横走線を重ねた文様帶を置く。横の原体圧痕文列、縦の短圧痕文列が普通である。

15の山形突起による例は波頂部にV字モチーフの圧痕文列があり、第2図関山式波状縁にみられるモチーフと共に通し、更に有尾式系大形菱形文土器にいたるまで形を変えて存在するものである。最古例として新田野段階の波状縁へ行き着くが、この要素だけでは年代の決めては欠ける。美沢2遺跡AH-16住居跡などで伴出した繩文のみの土器（14）の存在も手掛かりとなろう。

美沢3遺跡の19、20の小平底のあるもの、北海道納内6丁目付近遺跡例（西田 1988 1989）の完全な平底の例もある。これらは長七谷地Ⅲ群系土器の器形から大きくなれば、撚糸文横帯間に押圧文列を挟んでや幅広な文様帶を置いたりする。

美沢3遺跡では一方に16、18などの東鉄路Ⅳ式が出土したH-9遺構が存在する。18は縦長の器形で口縁部文様帶に第3図8の表館遺跡例と同構成であった。また、胴部羽状撚糸文帯の所々に横走ぎみな撚糸文の区画線があり、先に東鉄路Ⅲ式でみた多帶化を反映している可能性のある土器も存



第6図 東創路IV式及び関係土器(2)

1、8 美々7遺跡 2~4、11 美々11遺跡 5 天神前遺跡
3遺跡 9 三神峯遺跡 13 井沼方遺跡 14 庚申町遺跡 7、10~12、16~20 美沢
15 須取遺跡

在する。24の美沢3遺跡例は文様帶的に一層明瞭で、一定間隔を開けて横帶文が置かれている。

(3) 菱形モチーフを描く東鉄路IV式系土器（第6図1～7）

東鉄路IV式に胴部文様帶が菱形構成をとる例もしばしばみられる。撚糸文の帯状施文であることは通常の東鉄路IV式と同一であり、器形的にも第5図15例に近い。2では縄圧痕文列の区画線が胴部中央に置かれ、3では施文単位ごとに区画線がみられる。4は尖底部で、区画線や菱形構成が底部近くでも存在することを示す例である。口縁部文様帶は1、3が短圧痕文列、横圧痕文列との組合せであり、一般的であるが、2の口縁部縄圧痕文列は東鉄路III式例にも共通する要素である。

なお、撚糸文による菱形構成という点を胴部上半に限定してみた場合、全く同じモチーフがとられるものとして埼玉県天神前遺跡18住居跡例（田中ほか 1991）がある。前稿では菱形文という構成原理が地域や時間を超えて存在することを示したが、その意味で天神前遺跡例は同一の系譜の流れにあり、菱形文変形の一形態と考えられる。6は2、3など同様、区画線が引かれるタイプの鉢である。底部が方形であることも特徴であり、その意味は今後の検討課題である。

7、8はより強く菱形を描き出したもの。短縄圧痕文列で区画されることは同じで、菱形の描出を直線の撚糸圧痕文列と短圧痕文列で組合せたものである。東鉄路IV式系の口縁部の縁を飾る文様帶の手法でモチーフを描いているともいえる。長方形、橢円形の底部にも同一の施文があり、底部装飾の延長の存在である。この菱形モチーフに最も類似した例に宮城県三神峯遺跡（岩淵 1980保角 1973）例（9）がある。器形が胴部上半で強く括れて全体のプロポーションも異なるが、口縁部上端のありよう、多段区画、区画間の菱形モチーフの展開した姿など、ほとんど東鉄路IV式と分類されている土器の中に存在する。併出した土器は宮城県今熊野遺跡（小川ほか 1986）15住居跡相当と考えられているが、個体的には検討の余地があろう。

(4) 脇部に区画線・綫縞文のある土器群（第6図8～20）

脇部に区画線が置かれる土器は、三神峯遺跡例のように括れ部に引かれることが多い。網取遺跡例（15）のような関山式新、有尾式系の要素を持つ土器にみられるが、単純な器形が多い東北本来の土器とされる例では少ない。関東関山式井沼方段階でも胴部中位にコンバス文の引かれるものがある程度であった。東北では14の山形県庚申町遺跡例を探すことができた程度である。

三神峯遺跡様の区画線を持つ例は量的に少ないが東鉄路IV式にも存在する。全体の構成はこのタイプの東鉄路IV式で完存品がないためはっきりしないが、底部へのすばまり方が少なく器高の高い器形となる可能性がある。

脇部区画線の一つに縄の結節で行うものも存在する。1のような通常の口縁部を縁どる文様帶が置かれる16や17の簡略的な幅の狭いもの、18、19のような文様帶を欠くものがある。18では撚糸による幅広縄文帶の下に結節を重ねた幅広な文様帶を持つ。第5図13の撚糸圧痕文による波状文と対弧を組み合わせた文様帶のある土器と同構成の可能性があろう。

20は口縁部に結節を重ねた文様帶を持つもの。脇部途中にも結節がみられ、結節が一般化した段階と考えられる。器形的にも1の腕状のものと比べると器高が高く、口縁部へ直線的に開く。底部

は尖底と考えられるが、急速にすぼまつており、布目遺跡、富山県南太閤山遺跡例(山本ほか 1986)などの底部形状に似たところがある。

結節あるいは綾縞文の頸在化は大木2a式や円筒下層a式の一般的な特徴であり、東北北半の縄文尖底土器でも多い手法である。結節の意匠化がこれらの土器にみられる特徴であり、羽状撚糸文の場合は施文の効果が全く異なるため一層頸在化しているように思われる。東北北半の縄文尖底土器より東釧路IV式系土器のほうが目立ち、この区画線により帯状区分の効果を果たしている。

以上、東釧路IV式系土器をいくつかの観点からながめてきた。器形的つながりでいえば長七谷地III群系の流れにあり、綱文系土器とも頸縫の存在と考えられる一方、綾縞文の存在からでは大木2a式や円筒下層a式との関連を想定せざるをえない。このように考えれば、相当な時間幅を想定せざるをえないであろう。遠藤の東釧路IV式の3細分もあるが、現在では時間幅は想定されるものの直ちにこの編年案の内容に賛意を表することはできない。

当初、東釧路IV式は全道的に分布すると考えた。しかし、今までまとまって出土したのは道央地域であり、道東の東釧路貝塚では断片的な出土しかみられない。中には道央地域にみられるような原体圧痕文による口縁部の縁を飾る文様帶の例もないわけではないが、副部に施文される撚糸原体が2本単位となるなどこの地域独特のものがあり、分布域の中心と考えられる道央からの変異の結果といえるかもしれない。道南地域でも後述するように、東釧路IV式系土器は存在するが、これらの土器も道央のIV式とは違ひが大きい。

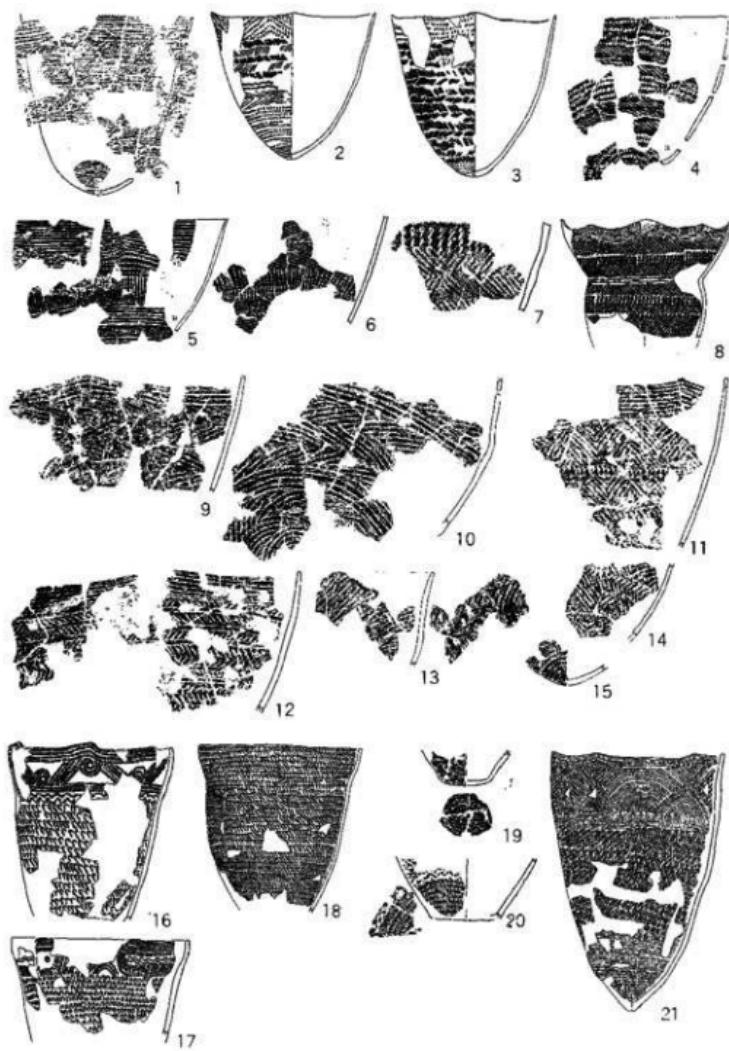
あらためて、道央部の土器群の位置を考えると、既に単独でニナルカ遺跡の東釧路III式新段階が占めている。これらIII式の出土状況はまとまりがよく、IV式が関係する余地はないと考えられる。したがってIV式はIII式の前あるいは後の両様が考えられるが、ここまで検討からはニナルカ遺跡のIII式の前に想定したほうがより整合性があるように思われる。

4 東北北半～道南地域での東釧路IV式系と関係土器

道南地域の東釧路IV式系土器はそれほど多いものではない。北海道中野B遺跡(熊谷ほか 1996)ではまとまった表館VI類の土器が出土し、早期末あるいは前期初頭にほかの土器が介在しえない状況にある。これに続くものは長七谷地III群が想定され、この段階の間は東釧路式系土器の存在する余地はないであろう。

そこで、道南にみられる東釧路IV式系とされる松前町白坂遺跡群の例(大沼 1989)をみたい。1は白坂8遺跡例で、口縁部を縁どる文様帶と多段に区画された綱文帶からなる。施文が粗く、一方に撚糸文が意識されているかもしれない。区画線は繩圧痕文列であり、綱文一帯ごとに施文しているように見える。器形は多段結節の口縁部文様帶のある第6図3の美沢3遺跡例に近く、胴部から口縁部にかけては直線的である。副部の多段化や器形がこの土器の特徴である。白坂9遺跡では2、3の4単位波状線をとる例がある。底部先端を中心とした刺突文列帯の置かれるのが普通である。

これらの手法は道央のIV式ではほとんどみられない文様帶であり、青森県幸田遺跡例(坂本1990)に象徴される底部周辺の処理も存在する。北海道トドホック遺跡例(小林編 1989)も同様



第7図 東鉄路IV式及び関係土器(3)

- | | | | |
|---------|---------------|----------|-----------|
| 1 白坂8遺跡 | 2、3 白坂9遺跡 | 4、5 元和遺跡 | 6、7 美々7遺跡 |
| 8 銅取遺跡 | 9~20 小奥戸(1)遺跡 | 21 幸畠遺跡 | |

な文様帶構成で、この種の流れの一端と考えられ、東北北半とも連動した変化の流れに位置していることがわかる。文様帶の全体構成は繩先端による多条の刺突文列により鋸齒を描く口縁部で、以下羽状繩文、結節、羽状燃糸文と続き、底部周辺の刺突文列へ至る。3の場合も平行する繩の圧痕文列、以下羽状繩文、底部周辺の刺突文列となる。

乙部町元和遺跡例（大沼 1989）は底部周辺に刺突文列帯が置かれて同一構成である。文様帶の多段化が進んだ例で、途中に横走する繩圧痕文列帯が置かれる。文様帶間は繩文や密接した縦の繩の圧痕文列が並ぶ。5は繩の縱位圧痕文列の数が少ないが、道央の美々7遺跡（西田ほか1992）に例（6）があり、胴部下間にみられた。上下に羽状燃糸文帯のあることは道央的IV式の変形された姿といえるかもしれない。

ちなみに、縦の刺突文列の観点でみると、美々7遺跡には菱形羽状繩文と多重のループ文列がみられた。このモチーフは起源を問わずにみれば、綱取遺跡例の関山式後半並行とされる交互刺突文系土器の文様帶区画線が採用されている。幅に長短はあるが、多重のループ文の押圧文では変わりがない。文様帶の多段化と合わせて時期や相互のつながりを考える時の材料となるかもしれない。

このように、道南の東鉄路IV式系の土器をみると、道央のあり方と相当な開きがあることがわかる。仮に遠藤の細分案に当はめても定義の枠外にあり、どの段階とするか決めがたい。時間的流れをIV式からIII式とすると、多段化を示すものが古いことになる。一帯化へ流れるとみることもできるが、この地域では一方に長七谷地Ⅲ群系の羽状繩文を基調とした土器群が存在する。幅の狭い口縁部区画帯以下羽状繩文の構成であり、この系譜からの変化を想定することも無視できない。現状でどのようにつながるかを想定して考えればよいかむずかしいが、文様帶の多段化、器形、施文帶のあり方、地文などを考慮する必要があり、今後の良好な共伴資料の出現を待ちたい。

東鉄路IV式を考える一つの材料に下北半島北端にある北海道小奥戸（1）遺跡（斎藤 1994）の資料（第7図9～14）がある。いずれも尖底の底部から内反りしながら大きく開く鉢状の東鉄路IV式の器形をとる。文様帶構成的にも口縁部に側面圧痕文列の文様帶があり、以下羽状燃糸文、鋸齒状効果のある繩文、繩の短圧痕文列と種類が多いが、地文の施文が展開する。底部には平行した繩の圧痕文列がめぐる。10では平行した繩圧痕文列帯が間隔を置いて配されており、底部の圧痕文列と平行となる。分帶化の一般的なタイプであることがわかる。また、鋸齒状効果を持つ繩文施文の土器には短圧痕文列で区画線が引かれたものもあり、このタイプでも多段化を反映している。

12は斜行、羽状の繩短圧痕文列が並び、圧痕文列間に側面圧痕文が置かれる。1の白坂8遺跡と相似した文様帶構成の土器である。小奥戸（1）遺跡の全体の器形、波頂部形状、文様帶多段化の方向、底部にみられる刺突文列帯の存在など相互に共通性の高い土器群である。ただ、個体別の変異幅が大きく、時間幅、個体の幅の中で考えると更に多様な土器の存在が予想される。

この小奥戸（1）遺跡では別地点で炎館式系土器（三宅 1989）の良好な資料が括出土している。いずれも多段ループ文で器面全面を覆う。

15は口縁部文様帶に非対称の小突起の付く土器で、連続刺突文列は上下が区画され、区画内を鋸齒状文が描かれる。鋸齒の頂部に円文があり、菱形文モチーフの中央円文からの系譜上にある前期前半の典型的モチーフである。胴部との区画は連続刺突文帯、コンパス文。16の口縁部は方形のモ

チーフで、中をコンパス文で埋められていた。17は全面ループ文で埋められたもの。平底の底部周辺に押し引き文帯が置かれることも表館式の典型といえる。表館遺跡出土例には同じコンパス文を使うが、多段化したものが多く、必ずしも同一時期といえない。

繩文帯をループ文列のみで器面を飾るのに幸畠遺跡遺跡例がある。器形は細長く、底部は尖り、表館式とは異系列とされる早稻田6類系に当たる。口縁部の文様帶は押引による刺突文列で、底部の押引文列帯も早稻田6類系であることを示す。武藤康弘のようにループ文が主流の表館式から羽状繩文を主流とする早稻田6類へ変遷すると考えれば、早稻田6類系の器形でループ文のみ副部地文が施文された幸畠遺跡例は、早稻田6類最古式に置くほかなくなる。早稻田6類系土器が東北北半の固有の土器群であるのに対し、表館式は東北南部から北海道南部まで広がる土器であり、広域に存在する土器とすることができる。この意味から表館式は搬入型式的であり、これまでのようそれぞれを前後に置くという縦の序列のみで考える必要がないのではなかろうか。また、表館式、早稻田6類とも時間的幅があり、筆者自身もうまくすり合わせができていない。

いずれにしても、施文の手法に相違があるが、文様帶分帯、主要モチーフのありようは共通するところがある。小奥戸（1）遺跡、更には道南部の東釧路N式系土器へも連なる要素であり、年代序列、相互のつながり方とも合わせ今後の課題としたい。

5 東釧路式系土器のモチーフと器形のバリエーション

今回東釧路式系土器を扱うことになったきっかけは、苫小牧市静川5遺跡（工藤 1996、兵藤ほか 1998）の注口土器の存在であった。注口部の形態も短い環状の粘土板が貼り付けられていた。また、樽状となる全体の器形や2単位波状となる口縁部形態がとられる。いずれも関東周辺の前期前半から中葉の諸型式に共通する要素を持っているといえよう。

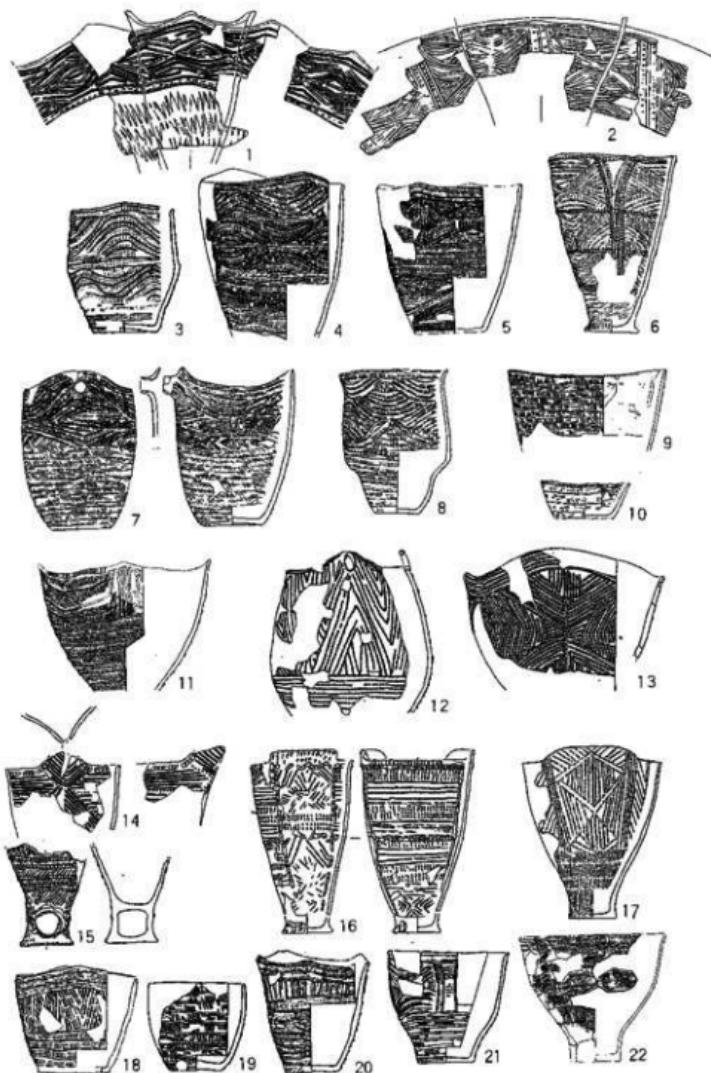
また、7の文様帶構成からわかるように、上半に幅広口縁部文様帶、下半が地文的素文帶の構成をとる。当然中茶路式であり、この素文帶は地文繩文の上に平行した細隆帶が並ぶ。口縁部文様帶と対比すれば素文帶といえるものであろう。

前稿では菱形構成となる口縁部文様帶に着目し、第8図1～6を検討した。モチーフが同一であることは理解できたのではないかと思う。時期の問題は前稿で検討したように、菱形文は早期末から中期前半の東日本に基幹的モチーフであることを考えるとなかなか決めがたいのも事実である。

ここでは、東釧路式系土器群にみられる器形のいくつかをみてみたい。

静川5遺跡例には注口のほか8の深鉢がある。上半は円筒形であるが、下半は底部を急速に絞めて細くする。横走する細隆帶の副下半の地文部で細くなっている。9は口縁部上端から横走する細隆帶が並ぶ粗製の土器で、単純な器形かもしれない。10は単純な器形の器高の低い皿である。中茶路式では出現頻度の高い器形である。

17の札幌N-256遺跡例（上野 1975）は4単位波状縁、底部が欠損しているため決めがたいが、器形的には東釧路N式に近い。波頂部が尖りぎみなことも共通する。しかし、伴出した土器は単純に開く細長い器形の土器であり、6の例に近かった。12、13は副部下半で急速にすばまるタイプで、17や22のような器形の可能性もある。波頂部の形態的特徴から中茶路式段階の東釧路N式系の器形



第8図 東鉄路式系土器にみられる器種

1、2 網取遺跡 3 中野A遺跡 4、5、18~21 納内6丁目付近遺跡 6、17 美沢2遺跡
7~10 静川5遺跡 11 札幌No256遺跡 12~15 キウスク遺跡 22 奥尻島松江遺跡

とすれば、本州側からみれば札幌市という北海道でもやや奥に入り込んだ地のため、東釧路W式を覆うように中茶路式が入り込んだ結果成立した土器とする見方もそれよう。この種の器形の増加を待つ必要があるが、両者をつなぐカギとなる可能性がある土器である。

中茶路式で胴部下半を急速に絞る本来の器形をとる土器には12、13、17、22がある。単純な器形の細身の深鉢と違い、器高はやや低く鉢状であり、胴下半は外見からは高台状ともいえる。13では胴下半に最大径のある口縁部を絞った中茶路式でも特殊な器形である。地文を欠くことは例外的存在かもしれない。それに対して13は7と同様な2単位大波状線をとる。モチーフ上下区画帯からびた対のV字間縦菱形を多条な細隆帯で埋め尽くすものあり、菱形文変形の一つの姿であろう。

17は同器形ながら波頂部は大きな板状把手がある。波頂部を中心に縦に区画された文様帯が置かれる。16は17と同タイプの把手が付き、共通性を持つ。16は東釧路III式一タイプ、17は繩の側面圧痕文でモチーフを描出する。菱形を縦に並べたものであり、区画内外を繩圧痕文で埋め尽くしている。13の隆帯が繩に反転した菱形モチーフともいえる。16と17は道央と同地域であり、ニナルカ遺跡例から美沢2遺跡例へと続く一タイプと考えられる。

14では口縁部の一部を外に引き出して小突起状にし、片口状の注ぎ口が作り出されている。12も形態的には相似し、小孔がある。図が正面のみではっきりしないが、14と同様かもしれない。

15は高台の付く土器で、前期では類例を見出せなかった。対の円窓、底面の存在など独特なものである。胴下半しかないためはっきりしないが、底部で絞った器形の鉢形の可能性もある。

このほか、18~21のような器高の低い単純な器形の鉢がかなりの率で出土する。中茶路式では一般的な器形とすることができます。中野B遺跡（和泉ほか 1995）の3や納内6丁目付近遺跡の5もこの種の器形である。深鉢以外でも皿から鉢まで整うことになる。文様構成も図示したものではすべて異なり、菱形となったもの、繩圧痕文列で鋸歯文となるもの、縦の細隆帯列を並べてものなど様々なタイプがある。この種の要素は深鉢以外の土器でも安定的に存在することになる。

6 各地の東釧路式系土器の展開と序列

関東の花積下層式から関山式へはその間に新田野段階、ニツ木段階を置くことでスムーズに移行すると考えられてきた。黒坂はその間の経緯を土器製作に求め、成形単位に文様構成をとるとした。胴部の帶状化を成形手法と関係付け、「帶間羽状構成、輻狭均等の帶間羽状構成、異なる種類の横分帶構成」へと展開するとし、花積下層式から関山式への移行を解説した。胴部繩文帯の変化を的確に表現しており、時期分けの観点からも基本となる視点といえよう。

ところで、関東における時間軸としての花積下層式、関山式の項で述べたように、花積下層式では内部的にも単系では理解できず、また、地域差も大きい。この段階も複数の系譜を考慮してそれぞれの地域でのあり方を相互比較しながら検討する必要がある。また、羽状繩文の成立についても解明されたといえる状況はない。関山式を代表する大波状線の口縁部形態は新田野、ニツ木式からの変化形態として理解できる一方、ニツ木式が幅狭均等帶間羽状構成でありながら、関山式を画する胴部での文様帯の多帶化は、関東周辺地域で考える限り独自に成立したとしなければならないであろうが、その要因は見当たらない。

関山式の器形をあらためてながめてみれば、多様な器種が出現し、前項で検討したような注口、片口、皿、鉢、皿など新たな器種の出現もみられる。深鉢でも口縁が開き、頸部でくびれ、胴部の膨らむ器形を基本とすれば、直線的に口縁部へ開く器形、胴部下半を絞り込んだ器形、特に片口、注口土器で頻出するこの器形は前段階に系譜を求めるべきであろう。

胴部下半を大きく絞り込む器形を時期、地域の枠をはずしてみれば、前期では長野、北陸地域の通有の器形であり、近年話題となった「根小屋式」(寺崎ほか 1996) の鉢などもこの器形をとる。また、太平洋側であるが網取遺跡の広義の浮島式、興津式にも共通する。更に、前期末の吹浦タイプ、更に後期の門前式にいたるまで極めて息の長い存在であり、それぞれの時期、地域で異なりながら前稿主題の菱形文モチーフをしのぐほど根強い要素と考えることもできる。

今回検討したように東釧路式系土器群の中にはこれらの多くの要素が存在する。東釧路式系土器の年代的位置付けについては一部に疑問が提出されていたが、一般的には早期後半、末に置かれてきた。層位的裏付けも述べられてきた。この見解をとる限り関東、東北に展開した羽状縄文系土器群はすべて北海道に起源を求めて解決することになろう。

ここまでみてきたように、東釧路式系土器を早期末の段階に置くと、他地域と全体的な文化的現象と整合性を欠き、様々な側面で矛盾が生じる。集落、住居跡の盛衰の側面からみても関東で安定的に存在するようになるのは関山式段階以降であり、それ以前では住居跡そのもののが存在があつても数は少なく、遺物の出土量もわずかなことが多い。花積下層式で凶化しうる土器は、東釧路式系土器に比べても著しく少ない。本州系の花積下層式系が東釧路式系土器に代わって北海道に入るにより衰微すると考えることになる。早期後半の田戸上層式から始まる隆盛が花積下層式系土器の入り込むまで続くとする、北海道の以南に対する優位を唱える根拠ともなっている。東北縄文尖底土器の進出はこれらは気候の温暖化に伴う不適応現象とされているようである。北海道では屋内炉をもつ住居跡から定住性指向が強い文化から温暖化に伴う不適応から本州の植民地化せざるをえなかつたする(加藤 1982)の一般的な文化現象からすればきわめて不可解であり、北海道独自の文化的選択という特殊な事情を想定するしかなくなる。

東釧路式系土器の段階から遺跡状況の推移をみると、東釧路式系段階に著しい増大がみられる一方、前期では大沼が編年を編むことで苦労したように(大沼 1981 1984 1986)、長七谷地Ⅲ群系土器に象徴される東北北半系の土器でつないで組み立てざるをえない状況にある。本州での遺跡の消長とは全く逆の関係となっている。器形のわかる土器の存在も極めて限られたものになり、東北北半系の土器にも共通する土器が多いように思われる。

多量の出土がみられるようになるのは道南の円筒下層a式を待たなければならない。円筒下層a式の出現も明らかに東北北半系土器の北海道への進出であって、北海道独自に展開したものではない。また、円筒下層式の多量の出土と大沼の想定した前期土器群の量的比較からしても北海道での土器群、ひいては文化の消長に対してどのような構図を描き納めるか、大きな困難に直面するよう思う。

ここでは、検討してきた東釧路式系土器が持つ特色や序列について取りまとめておきたい。

東釧路式系でほかの土器群の関係が最もわかりやすいのはIV式であろう。IV式の口縁が大きく開

いた椀形の器形は、美沢3遺跡で知られた長七谷地Ⅲ群系土器とのつながりがあり、北海道主体とされる網文系土器の器形と関連し、器形的にどの時期の器形の変遷、推移でも同系列と考えることに矛盾のないものといってよいであろう。したがってⅣ式から長七谷地Ⅲ群へという推移が想定されてきたと思われる。しかし、長七谷地Ⅲ群系土器は明らかな羽状縄文系土器であり、東北南部から関東でみる羽状縄文の推移を考えれば、Ⅳ式が撚糸文の羽状構成という延長で羽状縄文が成立したというのは無理があり、表館遺跡での撚糸羽状文のありようからも後出するとせざるをえない。

そのほか、Ⅳ式を大木2a式並行とする意見でみられる根拠なども加味して考慮すれば、とりあえずは長七谷地Ⅲ群以降、大木2a式の間に検討すべきように思う。

また、Ⅳ式の分布をみると、地域的な偏りがあるようと思われる。東釧路式系土器は道東の東釧路貝塚出土土器を標準とするが、Ⅳ式は道央の出土量が最も多く、基準的に扱われている。これに比べると道東でのⅣ式は出土量が極端に少ないだけでなく、文様帶の構成、施文原体も異なる。したがってこの地域が本流の地域とは考えがたい。道東のⅣ式は搬入型的であり、在地化した姿と考えたほうがよいであろう。一方、道南のⅣ式は道央のⅣ式から比べても道東とはまた異なった変異があり、東北半から日本海沿いに広がる特徴を持ち、年代を考える一つの要素になろう。

東釧路Ⅱ式（西田 1995）は定義にぶれの多い型式である。仮に北海道川上B遺跡（遠藤 1983）例（第5図25、26）を想定すれば、縄文地に間隔をおいて縄原体压痕文帯が配されたものとみることができる。帯状化の土器といってよい。この帯状化の視点でみれば第5図12の表館遺跡例、18の美沢3遺跡、ひいては第7図10小戸（1）遺跡の平行した縄压痕文列の土器、また、第7図2の白坂9遺跡例ではⅣ式の羽状撚糸文に加え、結節帯、斜行した縄压痕文列などがあり、それぞれ固有な表現形態がとられていることになる。このことは一つの独立した段階を示すのではなく、文様帶構成の表現形態、すなわち多帶化を示すそれぞの地域での表現形態と理解するとわかりやすい。

東釧路Ⅲ式は最近武佐川1遺跡、ニナルカ遺跡が報告され、実像がはっきりしてきた。武佐川1遺跡例からはその起源が羽状縄文を基調とし、更に胴部に縄による短圧痕文列の区画線を何段か配し、多段化の方向を示していることが明らかになり、長七谷地Ⅲ群に後続し、早稻田5類系の器形を引き継いだ土器と考えた。地文に幅狭な羽状縄文を地文としたⅢ式は、今のところほかの地域になく、まず道東で出現した可能性が高い。

ニナルカ遺跡では一部羽状縄文を地文とするものもあるが、区画帶の幅が広くなつて文様帶化し、多段化が進んでいる。区画帶は平行する縄原体押圧文の列数の増加で行われる。区画帶間は武佐川1遺跡が羽状縄文であったものが、縦の短縄文押圧文列の充填へ変化している。また、波状と対弧のモチーフは形を変えて多くの個体で登場する。表館式、早稻田6類的モチーフである。

今回、コッタロ式は定義そのものを筆者自身が十分消化できなかつたため、検討しなかつたが、ニナルカ遺跡例には中茶路式の縦の短縄文押圧文列が出現し、第8図16に示したように、器面を縦に分割する文様帶、菱形、鉛歯などのモチーフが出現しており、中茶路式の諸要素をみることができる。このことから東釧路Ⅲ式、中茶路式へ変遷する過程の中で存在すると考えられよう。

このように考えると、道央では東釧路Ⅲ式、Ⅳ式共に量的に安定して出土しており、両者の共存を示す事例も存在しない。ニナルカ遺跡の東釧路Ⅲ式にみられるように、中茶路式につながる諸要

素を持つことからIV式をこの間に置くことは不可能で、III式系と別系列で展開する土器と理解するしかないであろう。ニナルカ遺跡のIII式は武佐川1遺跡のIII式が長七谷地III群に後続し、関山式古段階前後とすれば、これに後続し、関山式中から新段階と考えたい。このように考えれば、IV式の始まりは二ツ木式前後が想定されることになろう。

函館を中心とした道南の土器をみると、赤御堂式、早稻田5類系、長七谷地III群土器が安定的に存在する。そして、IV式系土器もみられるが、先に図示したように、底部周辺の文様帯、胴部の縄文帯、胴部での区画帯など表館式、早稻田6類系の要素を持つ。道央のニナルカ遺跡に代表されるIII式は、大沼の集成した資料集でもほとんどみることができない。一方、道南のIV式は他地域でほとんどみることのできないものであり、この地域独自のものと考えられる。IV式に区画帯が置かれることや羽状縄文を含め、III式にも存在するものであり、北海道豊原2遺跡（中村ほか 1994）などでみられる撚糸羽状文の道央に近いIV式から今回取り上げたIV式へと変遷し、これに、一部縱長の器形のIII式的土器が共存していることが予想される。

これに対して、綱縫帶を文様描出の基本とする中茶路式は全道で普遍的な存在であり、多くの遺跡でその存在が確認されている。奥尻島松江遺跡例は胴下半を急速に絞った器形で、この地域の中茶路式を象徴するものである。

以上、東北北半から北海道にかけて土器群の変遷、地域それぞれのあり方を通観してきた。そこでこれらを表としてまとめると次のようになろう。ただし、それぞれの地域、段階の土器を内部に入り込み、細かな検討を要する。これはあくまで遠い関東の構図からながめたものである。

関 東	道 南	道 央	道 東
花 桜 下層 古 中 新 新新	赤御堂系	赤御堂系	赤御堂系
	早稻田5類	早稻田5類	早稻田5類
	早稻田5類	早稻田5類	早稻田5類
	長七谷地III群	早稻田5類	早稻田5類
二 ツ 木	東鉄路IV・東鉄路III	東鉄路IV・東鉄路III	東鉄路III
関 山 古 中 新	東鉄路II・東鉄路IV 縄文系	東鉄路III	東鉄路II・東鉄路III
	東鉄路IV 縄文系	東鉄路III	東鉄路III
	東鉄路IV 縄文系	東鉄路III	東鉄路III
黒 浜	円筒下層a	東鉄路III	東鉄路III
諸 磯	中茶路	中茶路	中茶路

*東鉄路III式には新しい段階でコックロ式を含む

おわりに

眼前に展開している事物あるいは出来事と我々がどのように対峙し、そこから理解、解析を進めるかは我々サイドの構えで大方の方向が決定する。このことは、眼前的事物、出来事とは全く別次元のことであり、その全体像を明らかにするということは不可能といってよい。

今回対象とした関東での花積下層式、関山式の序列についても研究者それぞれの立場から異なる意見が出されており、筆者の立場もこの一つといつてよい。また、その内容についても対象に対するアプローチの角度、ねらいなど多くの要素によって左右される。ひるがえってこのことを考えると、我々は豊かな対象をどの角度からみるかがいつも問われているにもかかわらず、常に別の角度からの結論も内在していると考えることができる。

今回検討した東釧路式系土器も北海道で主張されている序列は、研究に当たっての様々な条件からすれば、最も適切な結論がえられ、正当性の高いものとすることができます。しかし、一步からみると、地元北海道という立場からのアプローチであることは避けがたいものである。筆者の立場は全くの外部者であったが、関東の土器を中心にしかみられない立場ともいえる。このような論法でいくと、いずれも認識できない循環論に陥ってしまうが、これを回避するにはそれぞれの立場で周辺の様々な状況に対していくかに整合性を図る論法をとるかであり、それぞれの立場の相対化へ向かうことであろう。

筆者は、「列島」のそれぞれの地域がどのようなつながりを持ちうるかを考えたことがある。その結果、これまで考えられてきた土器による分布図は、アブリオリに存在するものではなく、地域間の絶えざる交通の結果生じたものであり、多層、多重的な関係の鎖で連なっていると考えた。関係のネットワークで結ばれているのであろう。このような立場で考えれば、北海道の対象諸型式は当然東北北部地域との結びつきを考慮して検討せざるを得ない。また、北海道にあっても地域間相互の関係の鎖を取り結ばれることになり、そこで出現する出来事は、多系、多層的な交通の結果が反映しているとみなければならない。

今回の検討は主体的とされるほんの一部の土器群を対象としたにすぎず、東釧路式と分類されるもの以外、あるいは中間的土器群、本体とされるものからはずれた存在の土器などは論点を絞るために除外した部分が多い。その意味で、北海道の道南、道央、道東での実際起ったであろう土器群の展開の姿を描き出したとはとてもいえないと自戒している。また、それを果たすには、筆者の立場をとったとしてもさらなる土器群への言及を要し、一層の周辺地域とのつながりを求めていかなければならぬであろう。このような本稿がダイアローグへの出発として諸兄の厳しい御指摘、御批判をいただき、再構築していただければ幸いである。

相原淳一 1994 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉土器群の様相について」 第7回縄文セミナー早
期終末・前期初頭の諸様相

荒井幹夫ほか 1978 「打越追跡」 富士見市文化財調査報告第14集

- 伊藤富治夫ほか 1976 「前原遺跡」 國際基督教大學考古學研究センター
- 和泉田毅ほか 1995 「函館市中野B遺跡」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第97集
- 稻村亮嗣ほか 1979 「黒川東遺跡」 川崎市
- 岩瀬康治ほか 1980 「三神峯遺跡調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第25集
- 上野秀一 1975 「S256遺跡 S257遺跡 S253遺跡」 札幌市文化財調査報告書XII
- 江坂輝弥 1959 「土器の諸様相 世界考古学大系」 1 日本1
- 遠藤香澄 1986 「川上B遺跡」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第13集
- 遠藤香澄 1988 「美沢3遺跡」 美沢川流域の遺跡群XII 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第44集
- 遠藤香澄 1989 「東経路式土器について」 美沢川流域の遺跡群XIII 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第62集
- 遠藤香澄 1989 「美沢3遺跡」 美沢川流域の遺跡群XIII 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第62集
- 遠藤香澄ほか 1997 「美々・美沢一新千歳佐渡の遺構と遺物」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書
- 大沼忠春 1981 「道央部の縄文前期土器群の編年について」 北海道考古学第17輯
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」 北海道考古学第20輯
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年についてII」 北海道考古学第22輯
- 大沼忠春 1989 「東経路式土器研究の現状と課題」 第4回縄文文化検討会シンポジウム 東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について
- 大沼忠春 1990 「美沢3遺跡 美々3遺跡」 美沢川流域の遺跡XIV 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第69集
- 大沼忠春 1996 「施文原体の変遷—東経路式土器—原体と施文のあり方」 季刊考古学第17号
- 大島卓二 1980 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書」 背景県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 岡本 勇 1965 「関東」 日本の考古学II
- 岡本 勇 1970 「下吉井遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告1
- 奥野麦生 1987 「タカラ山遺跡」 白岡町タカラ山遺跡調査会報告
- 小熊博史ほか 1994 「布目遺跡」 卷町史 資料編I 考古
- 小倉均ほか 1980 「大間木内・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第13集
- 小倉 均 1983 「井沼方遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第32集
- 小倉 均 1986 「馬場小室山遺跡(第12次)・井沼方遺跡(第9次)」 浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第6集
- 小野正文 1986 「糸道堂I」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集
- 小野正文 1987 「糸道堂II」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集
- 加藤邦雄 1982 「縄文尖底土器」 縄文文化の研究3 縄文土器I
- 金子直行 1989 「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」 埼玉考古第25集
- 金子直行 1989 「下段遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第87集
- 河野広道・沢四郎 1962 「東経路」 銚路市教育委員会
- 工藤竹久ほか 1988 「赤側堂遺跡」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 工藤 勤 1996 「静川5遺跡発掘調査概要報告書」 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 黒板穂二 1981 「大古用遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第19集
- 黒板穂二 1984 「深作東部遺跡群」 大宮市遺跡調査会報告第10集
- 黒板穂二 1989 「羽状縄文系土器群の文様構成(点描)-1」 研究紀要第6号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒板穂二 1993 「羽状縄文系土器群の文様構成(点描)-2」 研究紀要第10号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒板穂二ほか 1993 「中継遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- 桑山龍進 1982 「薺名貝塚」
- 児玉卓文 1983 「長門町中道」 長門町教育委員会
- 小林達雄編 1989 「縄文土器大観」 第1巻

- 斎藤 岳 1993 「小奥戸（1）遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第154集
- 坂詰秀一 1964 「川崎市新作貝塚調査報告書」 川崎市文化財調査報告第1集
- 板本洋一 1990 「幸畠（7）」 青森県埋蔵文化財調査報告書第125集
- 佐藤達夫ほか 1958 「青森県上北郡早留田貝塚」 考古学雑誌第43巻第2号
- 佐藤忠春 1982 「奥尻島松江遺跡」 奥尻町教育委員会
- 佐藤雅一 1997 「神山遺跡群 造構確認調査概要報告書」 津南町文化財調査報告第21輯
- 下平博之 1994 「長野県に於ける縄文前期初頭 縄文系土器群の編年」 第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の縄様相
- 下村克彦ほか 1970 「花積貝塚発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告第15集
- 下村克彦 1981 「新田野段階花積下層式とニツ木式土器について」 泽和第19号
- 下村克彦 1996 「施文原体の変遷—羽状縄文系土器—花積下層式～関山土器」 季刊考古学第17号
- 庄野清寿 1964 「杉戸町日沼遺跡」 埼玉県北葛飾郡杉戸町文化財調査報告書第1集
- 庄野清寿 1974 「関山貝塚」 埼玉県埋蔵文化財調査報告第3集
- 庄野清寿ほか 1978 「貝崎貝塚第三次発掘調査報告」 大宮市文化財調査報告第12集
- 鈴鹿良一 1987 「羽白D遺跡（第1次）」 真野ダム関連遺跡発掘調査報告
- 鈴鹿良一 1988 「羽白D遺跡（第2次）」 真野ダム関連遺跡発掘調査報告
- 鈴木敏昭 1980 「足利遺跡」 久喜市埋蔵文化財調査報告書
- 先崎忠衛 1989 「同様遺跡」 滝根町史第二卷 資料編
- 武井則道ほか 1975 「新田野貝塚一千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚」
- 田中和之ほか 1991 「天神前遺跡—黒浜土地区画整理事業に伴う発掘調査Ⅰ」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集
- 谷井 麟 1971 「内畠遺跡第1群土器について—縄文早期末葉における土器型式編年—」 埼玉考古第9号
- 谷井 麟 1980 「舟山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 谷井 麟 1998 「菱形文の成立と変形、そしてその諸相」 研究紀要第14号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦ほか 1987 「三原田城遺跡・八崎城址・八崎城・上青梨子古墳」 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 谷藤保彦 1988 「ニツ木式土器」 群馬の考古学 创立十周年記念論集
- 谷藤保彦 1993 「芝山遺跡」 北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 出村 隆 1998 「移行の論理—石器群のデザイン分析と文化＝社会理論—」 先史考古学論集第7号
- 寺崎祐助ほか 1996 「清水上遺跡II」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集
- 中村公宣ほか 1994 「豊原2遺跡」 衛門町市教育委員会
- 中村誠二 1991 「大古里遺跡（第9・10・11・12地点） 稲荷原遺跡」 浦和市内遺跡発掘調査報告書第15集
- 中村誠二 1992 「大古里遺跡・白駒官窯遺跡・本李遺跡・白銀遺跡」 浦和市内遺跡発掘調査報告書第17集
- 名久井文明 1979 「北日本縄文時代早期編年に関する一試考（II）」 考古学雑誌第65巻第1号
- 西田茂ほか 1989 「深川市納内6丁目付近遺跡」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第55集
- 西田茂ほか 1990 「深川市納内6丁目付近遺跡II」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第63集
- 西田茂ほか 1992 「美沢川流域の遺跡群XV」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第77集
- 西田 茂 1993 「ふたたび東創路II式について」 考古論集 潮見浩先生追憶記念論文集
- 西田 茂 1995 「東創路II式土器について」 北海道考古学の諸問題 北海道考古学第31輯
- 芳賀英一 1980 「御平C遺跡」 母畠地区遺跡発掘調査報告IV 福島県文化財調査報告書第84集
- 林 謙作 1984 「縄文時代前半期」 北海道考古学第20輯
- 兵藤千秋ほか 1998 「柏原2・ニナルカ・静川5・6遺跡」 吉小牧市教育委員会
- 藤巻寧男 1992 「群馬県における縄文時代早期末から前期初頭土器群の様相—縄文系土器群を中心に—」 群馬県埋

蔵文化財調査事業団研究紀要10

- 藤巻幸男 1993 「五目牛溝水田遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第144集
- 細田 勝 1989 「黒浜式土器成立の背景について」 古代第80号
- 松浦史浩 1998 「松戸市二ツ木向台貝塚資料調査報告書」 千葉県史編さん資料
- 松山猛ほか 1998 「銅路市武佐川1遺跡調査報告書」 北海道銅路市埋蔵文化財センター
- 三浦圭介ほか 1989 「表館（1）遺跡III」 青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
- 三宅徹也 1985 「表館遺跡発掘調査報告書II」 青森県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 三宅徹也 1989 「早稻川I 6類と表館式との関係」 第4回繩文文化検討会シンポジウム 北・北海道における繩文時代　早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について
- 皆川洋一ほか 1998 「キウス7遺跡（5）」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第127集
- 村田晃一ほか 1986 「今熊野遺跡II」 宮城県文化財調査報告書第114集
- 村田章人 1997 「原／谷畑」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
- 村田文夫ほか 1966 「川崎市新作D地点貝塚発掘調査報告」 川崎市教育委員会
- 山形洋一 1985 「宮ヶ谷塔貝塚」 大宮市遺跡調査会報告第13集
- 山下敬信 1997 「堀越中道遺跡」 県営ほ場整備事業大胡西北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 山本正敏ほか 1986 「都市計画街路七条・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（4）」 富山県教育委員会

研究紀要 第15号

1999

平成11年3月25日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社